
桔梗夜話

透多イグサ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桔梗夜話

【Nコード】

N7145U

【作者名】

透多イグサ

【あらすじ】

天正一〇年。織田信長の勢力は絶頂期にあった。北の上杉を柴田勝家が、西の毛利は羽柴秀吉が、南の長曾我部は織田信孝が攻略を進めていた。

二月、遂に東の武田家へと侵攻を開始する。総大将は信忠嫡男、織田信忠。この武田征伐によって、織田家は日本国中にいよいよその名を知らしめる事となる。

しかし朝廷では信長を関白・征夷大將軍・太政大臣のどれかにつけるべく交渉が続けていたが、暦法問題で対立し、思う様には進ん

でいなかった。

その頃、明智光秀は織田家の世代交代に焦りつつあった。そんな中、光秀は一つの噂を耳にする。それは……

序

浪人、である。

「じゃつで、一番安イチャとダンゴを一本呉れゆとのが解らんのか」

くたびれた渋茶の小袖、細目の、女のような顔立ちと白い肌に、フケを散らした茶筌ちやせんまげ。傾奇者を気取っているのか、女物の布で作られた鮮やかな紅の下緒を、腰からだらしなく垂らしている。

「ホレ、そこん奴等がくつとダンゴじゃ」

男は店の者にひとしきり喚くと、手近の客に向かって顎をしゃくった。顎の先に居るのは町人風の娘、蘇芳地の小袖には辻が花染で白く抜かれた千鳥と山茶花さやんか、一重瞼の目を笑みに細くし、はしたなくも両手に団子を持って、器用に膝上に湯飲みを乗せている。

成程、茶と団子が欲しいと云う事なのだろう。

訛りのきつい男だった。

何処の出であろうか。とかく聞き取り辛い喋りである。

「筑紫（九州）言葉やね」

傍らから、団子含みのくぐもった声が聞こえた。 その時丁度

三本目を口に入れた、件の娘である。

「そんお人、茶と団子を一本欲しい云うていまんねんよ」

店人が驚いたふうにな娘を向いた。

男も娘を振り返る。

娘はにっこり愛想笑いを浮かべ、

「お侍はん、京に來はったんなら、きちんと京言葉使わんといかへんよ」

男はまたたいて娘を凝視した。

そして首を振り振り「……俺は京語ば喋つとつ」

「いややわア、いっこも喋れてへんやないの。お侍はん何処から來はったん？ ぶぶ漬けでも食べなはる？」

「いらん」

店人が奥へ入り、やがて団子と茶を運んで来、それを男の傍らに置くのを見届けてから、女は再び笑顔を浮かべて男に語りかける。

「遠くからようお越しやす。島津か何処かのお武家はん？」

「うんにや、浪人じゃ」

よほど腹が減っていたのだらう、外見には似つかわしくない行儀の悪さで、男は団子にかぶりつく。

「……礼を云う。有難さげ申した」やがて全部を平らげた後で、男は改めて礼を述べた。

女は笑顔のまま。

「滅相もない。お侍はん、名前何と云いはりますの。折角の縁やさかい、訊きとうおますなア。」

ウチはたかこ、敬う子と書いて敬子たかこ云います。普段はとよと呼ばれておりますけどな」

「……城八郎。佐多城八郎忠尚さたしろはちろうただなお」

そうして男は視線を移し。「おまんさは何ばゆつと」

無言で成り行きを見守っていた、とよの隣に坐る男は、一瞬驚きに目を見張って短い髪を掻いた。

「儂は与兵衛。明智与兵衛光國じゃわあけちよへいみつくに」

男が置いた湯呑みの中に、紅い楓が舞い落ちる。

山は錦の如くに彩られ、時折吹く風に冬を感じる日であった。

天正九年十一月、京は三条での事である。

破ノ序 一

『安土二越し候へば 柿、味噌等携えて御座候事
尚、本丸観覧二際し附一人壱拾疋也』

「また戯たわけた事を……」

その簡潔きわまりない信書を膝の上に置くと、岐阜の方は溜息を
ついて天井を仰いだ。

「上様はどう云うつもりでござらっせるのでしょうか」

侍女のといが膝を進めて、遠慮がちに口を開く。

岐阜の方は首を上げたまま目を閉じた。

「……安土に行く際には、田楽味噌をたんと用意してやりんさい」
といがまたたく。

岐阜の方は苦笑して云い足した。

「甘味が欲しいんやろ」

ああ、ととも察したふうに頷いた。「相変わらず京風の薄味は
よう（碌に）食べられへんのですか」

まるで幼子のおいたを語る様には笑う。といの叔母は各務野、
岐阜の方の乳母である。とい自身も、岐阜の方が稲葉山城に居た頃
から仕えていたから、お互いに気安さがあつた。

「安土に城を持って行きんさつたのに、彼方の食事がお口に合わへ
んのでしたら、どうしんさるおつもりなんでしょうかねえ」

ついでに、岐阜の方の夫に対しても遠慮がない。

「サテ」こめかみを押さえ、岐阜の方は首を下ろす。彼女にとって
は考えたくない、気の重い事項であつた。

「本気でどう考えてござらっせるのだから。まさか一々城介殿に運ば
せるおつもりなんかね」

おそらくは味噌倉やら醸造職人やらを尾張から呼び寄せるつもり

だろうが　住処を変えたのなら、多少は現地に馴染む努力もして欲しいと、岐阜の方などは心から思う。

もつとも、夫にそんな殊勝な心掛けなど期待するだけ無駄な事は、三十有余年の内に身に染みて知っているのであるが。

「……今から安土行きを取り止めには出来へんかしら」

「岐陽様からお叱りを受けんさる御覚悟がお有りなら」

女主人の呟きを、侍女はすげなく受け流した。再三の要請の末の安土行きであるから、これ以上引き延ばせる筈もないのは、お互いよく理解している事だ。

岐陽様　岐阜城主織田信忠も、岐阜の方が出立する日を今か今かと待ちわびている。

「コレ」岐阜の方は僅かに眦を上げた。「岐陽様、ではないよ。岐阜様とお呼びんさい」

と、いが平伏して詫びるのを、岐阜の方は溜息をついて見下ろす。

夫が井の口一帯を岐阜と改めて大分経つが、古くからの国人衆は未だその名に馴染まない。斯く云う岐阜の方も慣れないが、それでも名付けた城の人間が旧名を用い続けるのは如何なものか。

肝心の夫は、岐阜の名が定着する前に安土へ移ってしまったが。

「それにしても……」岐阜の方は首を傾げた。

「一人きり拾定、と云うのは何なんやろうね」

「ハテ」といも小首を傾げる。「何かあらつせるのでしょうかねえ」岐阜の方が信書を見せると、「いえ、書状にはコレと申しまして

何も……」

「本丸観覧二際し、と。……本丸で見せ物でもなさるおつもりかねえ」

「女舞でもなさるとか」

「いくら何でも五十路の女装は無理があるんじゃないの」

「上様ならそれでも遣りんさりそうでございますが」

「それは非道い拷問やね」

ひとしきり笑い合ってから、岐阜の方は改めて信書を見返した。

「本当に、何をしんさるつもりだか。他の方々には、どう連絡が行つとるのやら」

＊ ＊ ＊

与えられた席次を三度確認して、神戸三七郎信孝は腕を組んで唸った。かんどさんしちろうのぶたか

安土城の年頭参賀の予定は例年通りである。春に出陣を控えている為過度の献上品は控える由、との事であるが、それより他は昨年と全く同じ。席次は織田菅九郎信忠、北畠三介信意おたかなくさうのぶただ（後の織田信雄）きたはたけさんすけのぶあき、織田三十郎信包、そして三七郎信孝の順である。

しかしながら信孝の表情は厳しい。

相も変わらず北畠の兄と明確な差を付けられているのが気に喰わない。それもあるが、今回は更に懸案事項が加わったからだ。

元々、兄の三介信意については、信孝はさほど気に留めている訳ではなかった。折に触れて自分が格下に置かれている事に不満がないではなかったが、それはあくまでも家格に由るものだと思っている。父信長が子煩惱なのは子の目線から見ても間違いない。だから今は信意も厚遇されてはいるが、長兄の信忠が本格的に織田家の采配を振るう様になれば必ず自分が上になれるという自信が、信孝にはあった。所詮はサンスケ殿である、敵ではない。

問題は別の処だ。

おたけんざぶろうのぶあき
織田源三郎信房。

先頃新たに加わった弟について、信孝は思いを馳せた。新たに加わったと云っても、齡は既に一五歳、元服も済ませている。つい先頃迄武田の人質だったのを、送り返されて来たのだ。

信房は幼名を坊丸と云い、三つか四つの年に東美濃の岩村城、遠山家やまに養子に出された。その存在は知っていたものの、信孝と信房の間に面識はない。岩村城が落ちた後は甲斐武田家の元に送られ、人質となっていた為だ。送り返されて来た後、父信長や兄信忠とは

既に対面を済ませているが、信孝とは今度の御年始が、初めての顔合わせとなる筈だった。

信孝は改めて書状を眺めた。そこに織田源三郎信房の名はない。犬山城主とはいえ立場は信忠の与力 信孝の後釜として連枝衆れんしゅうに組み入れられたのだ であるから、信忠や信孝と同列に扱われる筈もない。そんな事は重々承知している。

だが信孝の気は晴れなかった。

父信長の、信房に対する可愛がり振りは、並々ならぬものがある
と、そんな気がしてならなかった。――一月の安土城での対面では秘蔵の日向鷹や駿馬、御持鎧おもぢやうを下され、更に信房と共に甲斐から帰つて来た側仕え共にも様々な品物を送られた。対面の前に既に犬山城を与え、源三郎信房の名を与え、信忠附与力としての地位を与えられている。春にはその信忠と共に武田攻めにも参加するらしい。

これが、近頃彼が危惧している事であつた。

必死の思いで手柄を積み重ね、漸く三好家との養子を進められる程に信長への信賴を得た信孝にとって、信房の存在は降つて湧いた瘤だった。実際、彼は優秀なのだろう、武田から帰つて来て早々に今度は織田家側の人間として武田家との交渉に就いている。

養子として過ごした武田家でも、信房の評価は高いらしかつた。

信房は武田家で元服し、そこで勝長と名乗っている。武田勝頼に従つて戦にも出、北条がその様を賞賛したとも云うし、恐らくは信長が彼を気に入っている理由もそこにあるのだろう。何処か 神戸家よりも格が下の家にも 養子に出てくれていれば煩う必要もないのだが、今の処信長に信房を養子に出す意思はないらしい。

現在成人している信長の息子達の中では信忠と唯二人の織田姓である。

（これは単に長く人質となっていた息子への気遣いか、それとも更に上の地位に就けるおつもりか……）

信長は徹底した実力主義者である。それだけに、有能であると判断すれば長幼の序など一顧だにしないであろう。

十も年が離れている弟に、よもや足下を脅かされる日が来るとは想像だにしなかったと云うのが、神戸信孝の正直な思いだった。

破ノ序 二

「右府さま、年始は安土のお城で迎えはるやねんて」

土間に腰を下ろすや否や、とよは口を開いた。

「さいぜん村井^{むらい}（貞勝）はんの処に美濃のお使いが来とつたそやねんけど、何でじゃも正月に本丸を開放すんねやって。百文で観覧させたるやさかい金持つて来イてお触れが出とるんやと」

碁盤から顔を上げ、土間を振り返つた与兵衛が応じる。

「年頭参賀はどうしんさるおつもりじゃね」

「天守でしはるんちゃう？ そないなければ終わってから開放しなさるとか」

「そげんこつよか」コソリと白の碁石を移動させながら、城八郎も会話に加わつた。「ないごて美濃ン者が所司代ん家に来て申すか」

「美濃紙渡しにおいでやしたんやと。正月にお上に献上するさかい、村井はんが頼まшыつたんやって」

ふうむ、と与兵衛が唸る。「で、おまあさんは安土に行かつせるんか？」

「行けへんよ。禁裏で餅受けないかへんもん」

「うちも年頭は寺に顔出さなかへん（出さないと駄目）のやけどなあ」

二人の視線を受けて、城八郎は顔を顰めた。「……そいは俺^{おい}に行けゆとうんか」

「どうせ暇なんやろ」

「俺は昨日堺から帰つて来やつたばかりだぞ。大体、正月は伏見稻荷に詣でるんじゃ、暇じゃなか」

「歸りに山王はん参りはつたらええやないの」

「山王とはどけに在つかよ。先達もなかんに見て廻つて、仁和寺の法師^{ほうし}こつこでもすうんか。ちゅうか、安土城の場所ば知らんからな、俺は」

「後で教えたるさかいに、安心しい、お城はお山の上やさかい、よう目立ちはるし」

「そもそも、安土に行つて何ばすつのだ。何か用があつとならおまん等が自力で行け、俺はおまん等と違つて安土に伝手なんかん（無い）ぞ」

「せやからその伝手を掴む機会をあげたるんやないの。右府さまん処にお仕えしたいんやろ？ やつたらお城に忍び込む位の事はしい」
パチンと手を打つてとよは立ち上がり、「云う訳やから御坊、今から城八郎どのに尾張言葉を叩き込んであげてな」

頼まれた御坊　即ち与兵衛は眉をひそめる。

「儂が喋つとんのは尾張言葉やないと何遍云つたら解るんやろな」

「大した違いなんかあらへんやろ。尾張も美濃も」

首をぐるりと城八郎の方に戻すと、与兵衛は嘆息した。

「あ、おまあさん碁石触つたやろ」

「待て待て待て待て」右手で城八郎を、左手でとよを制止しながら城八郎は腰を浮かせる。

「二つの話題を同時に進むうな。なんやなんだおまん等は、一体俺にないをさせ事としとんだ　オイコラ、そこん石は動かしちよらんぞ」

「喧しい奴つちな。ちつと書簡を届けて欲しいだけじゃわ」

与兵衛の言葉に、城八郎は顔を上げる。

「誰に」

「これとうひつがのかみ
「惟任日向守」

破ノ序 三

応仁の乱とそれに続く明応の政変から始まった乱世の世は、

尾張国織田信長の手によって終わりを告げた。

おたさけつうのぶなが
織田三郎信長は清洲三奉行彈正忠家だんのしょうちゅうけの出、父信秀のぶひでから家督を継いで大和守（清洲織田）家・守護斯波家しばを降して尾張統一を果たした。

駿河の今川義元いまがわよしもとを破って一躍世に名を知らしめ、続いて斎藤龍興さいとうたつおきを追放して美濃を支配下に置き、翌永禄十一年九月、遂に將軍足利義昭あきを奉戴して上洛する。

その後、六角氏、三好三人衆、伊勢北畠を滅ぼし、浅井、朝倉、延暦寺等による信長包囲網を次々と撃破して、天正元年七月、室町幕府將軍足利義昭を京から追放し、元号を元龜から天正へと改めさせる事で、一五代二二七年来にわたり続いて来た幕府の終焉を世に示した。

以降、長島一向一揆、長篠の合戦を経て天正三年には権大納言、右近衛大将に叙任され、天正七年には近江国安土に贅の限りを尽くした山城を建てそこに移り住み拠点とし、天正九年二月二十八日、京は内裏の馬場にて正親町天皇おおぎまちを迎えて京都馬揃えを行った。

威光は大八洲おおやしまにあまねく響き渡り、次なる天下人と目された信長は、更に土佐の長曾我部、安芸の毛利、甲斐の武田を討ち滅ぼすべく行動を開始する。

天正一〇年の事である。

* * *

安土城の薄暗い廊下を足早に、織田信忠は歩いていた。

擦れ違う女達が、何事かと目を丸くして道を開ける。城の壮麗な外観に比して、安土の天主は狭く、主人の部屋とそれに連なる小室が在るだけなのだから当然だが、まして隣り合う部屋を訪ね

るだけなのに、何故ぐるりと天主を一周しなければ行けないのかと
内心で毒づきながら、彼は御台所の部屋を目指す。

信忠の機嫌は宜しくない。

先ず第一に、先刻城内で死者が出たと報告があつた。

余りの人の多さに、總見寺そうけんじの石垣が崩れたと云うのだ。今や天下
を目前とした織田家にはおびただしい数の武将が居り、更にそれら
の武将には多くの部下が居る。それらが新年に一同に会すと云うの
だから、当然と云えば当然かもしれぬ事であつた。その処理を、何
故か岐阜城主である信忠が行っている。

第二に、森武蔵守長可もりむさしのかみながよしと毛利河内守長秀もうりかわちのかみながひでとが遭遇した。

あれ程二人をひとつ処に置くなと云つておいたのにだ。長可と長
秀は前年の、京の馬揃え以来互いを今生では相入れぬ敵だと看做し
ていた。実際には長秀が一方的に長可を嫌っているだけなのだが、
そこはあの鬼武蔵である。喧嘩は売られる前から買つてやるうとば
かりに殿中であろつがお構いなしに大槍を抱え歩いていた。頼りが
長秀の自制心だけと云うのが、何とも心許ない。

そして、第三に。

「これは殿様」

室の前に控えていた安土の方附きの侍女が、慌てて居住まいを正
す。

「安土殿は居わすな？」

室の前に控えていた侍女の返答を待たず、信忠は襖を引いた。

破ノ序 四

「この度は私共の不手際の為に御手を煩わせ候の事誠に……」

小倉鍋おくらなべと三条西さんじょうにしあこゝは額を床に擦り付けて室の主人を迎えた。

安土城天主、信長の隣の室の事である。

「お氣になさらず」

小倉の言葉をやんわりと遮って、大量の甘味と共に現れた安土あづちの方は腰を下ろす。「途中で竹生島に寄って参りましたが、あの距離では泊まり掛けと思われるでも仕方ありません」

昨年四月、信長が竹生島に参詣の折に、城の女房衆が無断で外出して大量に処分されると云う不祥事があった。

女衆の過半が出払ったと云う事で大問題となり、それが原因で、

岐阜の方 安土に移ってから安土の方と呼ばれている が安土に呼ばれたのである。

「相変わらずせっかちな御仁おじんやね」

「いえ……ひとえに妾わたくしの監督不行き届きゆえ……」

小倉は唇を引き結んで益々平伏する。その事で、女臈衆の筆頭である小倉や三条西は散々叱責を受けている。

「マア、過ぎた事をアレコレ云っても仕様がありません。今は忙しい時、サッサと務めに取り掛かりましょう」

云うや、安土の方は廊下に出し、「コレ、其許等、こちらに来んさい」

呆氣に取られる小倉や三条西を尻目に、安土の方は駆け付けた侍女達に次々と饅頭 安土の方が部屋に持ち込んだものを配り始める。

「あのう……御方様？」

あれよあれよと云う間に御台の間に人集りが出来た。薄暗い部屋に、女共の嬌声きようせいが明るく響き渡る。

公家、大名、会合衆えいごうしゅうの 信長へと献上された筈の菓子、侍従

の手へと渡って行く。

「家の人が好きやからと誰も彼も甘いものしか持って来へんで駄目ね」

二人の手にも羊羹を載せながら、安土の方はこぼす。「ホレ、今の内に好きなものを持って行きんさい」

二人が困惑して顔を見合わせた時、

「安土殿！」

やおら戸を開けて、織田信忠が姿を現した。

「これはこれは城介殿。謹んで新年のお慶びを申し上げます」

笑顔で迎えた安土の方に厳しい表情を向け、信忠は室内に足を踏み入れる。

「丁度良い処にいらっしゃった。ホレ、三法師にあげんさい」

「結構です」

差し出された菓子をけんもほろろに断って、「一体どう云うおつもりですか」

「何が」

「上様です」

ああ、と安土の方は頷いた。

「一人百文は高いと私も思っとったんですよ。大名はともかく小名、郎党衆まで、一律同額でございますからねえ。……前田殿の値切りは失敗致したでしょう？」

「何をやりからかしよるんですか又左マタザ（前田利家）は 問題はそこではござらぬが」

首を傾げる安土の方を、信忠は睨めつける。

「なにゆえ上様御自ら厩の口に立つとられるんです。否、そもそも御幸御殿を内覧させるなど伺っておりませんよ」

「ああ、やはり」哀れみの視線を、安土の方は向けた。「文句を云わへんから、可怪しいとは思っとったんですよ」

「知っとったんなら止めてください。何を考えとるんですか、武田攻めを控えとるんですよ、刺客でも紛れ込んだらどうするつも

りです」

「左様な事を私に仰られても……」

安土の方は小倉達の方を向いたが、彼女等は目を逸らして二人から逃げた。この正月、信長が企画したのは一人一〇〇文の観覧料での安土城内覧会だった。通常城に上がる事などない小名、大名を問わず座敷に上げ、御幸御殿まで 帝の為に用意された部屋など、安土の方でさえでさえ目にする事は滅多にない 見学させた。更に、行程の最後には信長手ずから礼銭を受け取った。

「マア、安土は上様のお城でございますし、折角機嫌なのを態々損ねる必要もありません。何かあれば己の責任と云う事で」

「己の責任？ ならば總見寺の後始末を私がしとるんのは何ででしょうかね」

「サア」

「かような時に諫言致すのが、正妻の役割ではござらぬのか」

「私如きに上様をお止め出来る筈もあります。私も十足払わされたのでございます。正月前に着いたのにも拘らず」

「……その時に私に御報告戴けなかったものか」

「何とはなしに、云つてはならぬ気がしたのです」

喚きかけた信忠を、安土の方はス、と手で制し、「よろしいか城介殿、上様は酒を飲まずして酔う事の出来る奇特な御方。素面の酔人程たちの悪いものはございませぬ。触らぬ神に祟りなし、たまの気晴らし、少し羽目を外したくらいは大目に見てやりんされ」

「たま？ よもや平素は羽目を外しておらぬと申すおつもりか」

「それはモウ、上様が吉法師と呼ばれておりました頃と比ぶれば」

「よう解りました」信忠は立ち上がった。「どうもこの城には奇人しか居らぬ様ですな」

扇を口に当て、安土の方は笑う。

「今更お気付きになられたか。この城に馴染んだ者にまともな者など一人も居りませぬよ。近墨必緇^{しずめ}近朱必赤^{きんしゅ}と申しましてな」

「年頭から傳玄の御教授痛み入るが、それは御自分も変人と御認め

になる事でござるぞ」

「それは勿論。でなければ三十余年の間にとくに逃げ出して居りま
する」

「左様でございますか……」

もはや反駁する気力も起きない信忠であつた。溜息をついて退出
しようとする背中に、

「アアそれと城介殿、源三郎殿をここへ呼んで来りやれ」

安土の方の陽気な声が飛んで来て、益々肩を落として信忠は部屋
を出た。

破ノ序 五

その頃、織田源三郎信房は胃痛に耐えていた。

安土城天主の控えの間、信長の寢室の隣の部屋に、今彼は兄の北きた畠三介信意、神戸三七郎信孝等と共に詰めている。信房の主である

織田信忠は部屋には居らず、初対面の兄達を前に信房はひたすらおそれかしこまって俯いていた。

北畠信意は、襖にもたれ掛かつて手持ち無沙汰そうに扇をいじっている。信房に興味はないらしく、目を向ける事さえしなかった。

一方神戸信孝の方は部屋の隅で彼等に背を向けて、ひたすら一人で茶を立てて飲んでいる。こちらも信房に関心はないらしい。

救いを求めて、信房は斎藤新五郎利治を見やった。同じく信忠つきの家臣である利治は、部屋の隅　信孝の対角線の位置で　ひっそりと、まるで居ないものの様にして控えている。直ぐに視線に気が付いた利治は一瞬信房の方を見　そ知らぬ振りをして前向き直った。

（何か、何か話題を捜さねば）

必死の思いで、信房は考えた。

（確か三介様は能が御上手だった筈……）

だが悲しいかな信房は猿楽に興味がない。武田に居る内にひとりの教養は身に付けたものの、信房が率先して学んだのは馬や弓や狩りと云った類、舞だの茶だのは無礼にならない最低限の手順が頭に入っているだけである。当然、突っ込んだ話が出来る筈もなく、無礼を働いて押し斬られるつもりは、信房には毛頭ない。

（三七郎様は……）

何が趣味なのか、全く知らなかった。外見が信長に瓜二つゆえ、干し柿などが好みだろうか？　しかしそんなものは持っていない。先程からずっと茶を立てているが、誰かに振る舞おうとするでもなし、話し掛けたら手打ちにしそうな勢いである。

このまま黙って坐しているべきであろうか。だがこの沈黙に耐え続ける胆力が自分に備わっているかどうか、信房には自信がなかった。

（手水に行つては拙かろうか……）

遂に逃げ出そうと決心したその時、

「コレ」

突然信意が声を上げた。

「三七、お前先刻から一人で飲みからかしとるけど、ちった（少しは）兄弟に振る舞わんかね」

声を掛けられた信孝は冷めた目で信意を振り返り、直ぐにまた首を戻すと、無言で立てた茶を脇に置いた。

「ホレ、御坊、のminsai」

信意が信房を向いて笑う。

信房は背筋を伸ばしたまま固まった。ノミンサイとは、一体

何の作法であろうか。

動かない信房に、信意が怪訝そうに眉を寄せる。信孝もその気配を感じてか、視線を信房に向ける。

背中に汗が浮かんでは伝って行くのを、信房は感じた。

その様子をしげしげと眺めると、不意に信意は吊り上がった唇の端を扇で隠し、

「何を緊張しとりやあすよ。取って食やせんがで、気軽に飲みやあ良えでよ」

更に動けなくなった信房に、信意は鶴の描かれた扇を向け、面白そうに語り掛ける。

「上様恐がつとりやあすんか？ そんな肩肘張つとらんでもええて上様でえりやあ親莫迦だよ。二きやあもよそさんやられてまつて往生こいだきやあ、おみやあさんがかわいくてしゃあないんだがね。上様よう説明せんでかんけど元服の事も怒つとりやあせんで、本当はでえら喜んどりやあすんだわ。ほうやでおみやあさんもあんまし気にせんといったってちょーよ」

「何だその似非尾張言葉は」

突然、信房の背後から助けが入った。

「源三郎、安土殿が呼びであらせられ……どうした？」

正月の、身も引き締まる空気と共に部屋に新風を運んでくれたのは信忠だ。色白細面の、元々細い目を更に細めて、振り返った弟を見下ろした。

「三介、お前は何をやらかした」

平伏して新年の口上を述べようとしていた信意は、おどけた風に口を曲げる。

「御坊が随分と緊張しておりました故、和ませてやったのでございます」

信忠が信孝に顔を向けると、彼は無言で首を振る。

「……十も年若の弟を虐めて楽しいか？」

「ヤヤ、何たるお言葉。兄弟の戯れを虐めなどと申されるとは、この信意、いと悲しうございます」

ヨヨヨと袖で顔を覆った信意を呆れた目で見下ろして、信忠は信房に向かう。

「お主もいやなら構わず意見すれば良い。三介はすぐ調子に乗るからな」

「いえ……私は」額を拭い、そう呟いたとき信房は二の句が継げない。まさか相手の言語が理解出来ぬのだとは到底云えなかった。

「のう御坊、儂は虐めてなどおらぬよな？」

部屋の隅で肩を震わせて忍び笑っている利治が憎い。

「暇なら下へ行つて餓鬼^{たら}ん達等の面倒見て来い。女衆では手に負えとらんから」

「恐れながら殿、折角の晴れ着を童共の手で汚させる訳には参りませぬ」

「……お主、生駒^{いしま}衆と一緒に伊勢に帰れ。今は馬借の稼ぎ時だぞ」
「馳走を戴きましたらば」

「……まあ良えわ」澄まし顔の信意を睨めつけると、信忠は信房を

振り返る。「安土殿が呼びである。御台の御座敷に参られよ」

「御台様が？」

オウ、と信意が扇で掌を打つ。

「丁度茶請けを欲していたところ」

「お前はそこで能でも舞つてろ 新五郎^{シンゴ}」

傍觀者を決め込んでいた新五郎利治は、今や体を曲げて笑いを堪えていた。

「安土殿の部屋へ源三郎を案内してやれ」

「……何か粗相でも致したか？」

不意にそれまで黙っていた信孝が口を開く。

「否」否定したのは信忠だ。「ただ御会いしてみたいとの仰せだ。

源三郎と安土殿は未だ対面しておらぬゆえ……そこまで緊張する必要はないぞ、坊」

肩肘張つて固まる信房に、信忠は優しげに声を掛ける。「新五郎から安土殿については聞いておらぬか」

斎藤利治は安土の方の実弟である。普段信房と共に居る事が多いので、当然、何がしかの説明はされたものだと思はれたのだらう。

いえ、と勢い込んで信房は返答する。「薬師参りをした女共を成敗し、粗相した茶坊主を押し斬つて叡山を焼き打つ夫に相応しい奇きよ……剛胆で聡明でお美しい方と伺つております」

信意が腹を抱えて笑い出した。

「……新五郎、後で少し、語らおうか」

「御坊様の御指導につきましては、傳役と御相談くださいませ」^{もりやく}

しれっとした表情で、義理の甥に利治は返す。そして信房に向かってやんわりと、

「御坊様、斯様な時は、嘘でもよろしいですから適当な贅辞を並べ立てておくものでございますよ」

「……実の姉御に対してよくぞそこ迄云えるな」

「姉なればこそ。嘘は何一つ申しておりませぬ」

ニコニコと、つくづく何を考えているか解らぬ義叔父であつた。
安土の方の養子になつて二十余年、信忠はこの男に口で勝てた事がない。

「私は子としてどう対応すれば良いのかな……」

そして今回も、反論の持ち合わせがない信忠である。

「そんな事より御台様がお呼びではございませぬのか」

天を仰いで嘆息する信忠を尻目に、信孝が冷静に指摘した。

「おお、そうだ」

信忠は膝を打ち、「新五郎、早う御坊を連れて行け」

「饅頭は一人五つずつな」信意が茶々を入れ、

「……その前に茶が冷めるのだが」信孝が床の碗に目を向けた。

「さて参りましょうか」

利治がまとめの言葉を述べて立ち上がり、信房を促す。

……己の家族付き合いに、そこはかとなない不安を覚える信房であつた。

破ノ序 六

「で、奇妙（信忠の幼名）」

そして。

「おみやあさん、なーんか忘れとらせんか？」

主の室で正座させられる信忠である。

「何か……とは？」

首をひねって、信忠は部屋の主に問い返した。先刻しゅま厩から帰って来たばかりの織田三郎信長は、姿を現すや信忠に問うたのだ。

「岐阜土産」

「は、御持ちしましたでしょう。乱ランか御方様が目録を持っていると思われませんが」

「見たわ。無いな」

「鮎は時期ではございませぬよ」 翻訳なしで信長と会話をこなせる様になる事が、織田家での出世に必要な能力である。

「美濃紙や拵いしやうえは他のものとまとめてあります故、お気付きになられなかったのやもしれませぬな」

「違っわ。他に在るやろ」

「……大根？」

「糞くそ戯だわけ。アホか。柿や、柿。力・キ」

「ハ？」 思わず信忠は声を上げた。「柿なら御方様が移られた時に山程持たせたでしょう」

実際、御台が岐阜を発った際には、渋柿が比喻ではなく山を形作っていた。

「あんなもん直ぐなくなるに決まっとなるがや」 信長も声を荒くする。「何で持って来やさんのや。何の為にみやあさん岐阜城主にしたと思っとりやす」

「どんなけ食べからかすおつもりですか。と云うか、何ですか、岐阜城主で、まさか柿の為に私に岐阜を譲ったとおっしゃるんで

すか」

「美濃つつつたら柿に決まつとるが。稲葉^{いなば}ん達等はちゃんと持つて来とりやあすやないかい。安藤^{あんどう}に岐阜渡すぞ」

「何抜かしよるんですか。それ本気ですか。でしたら御自分がいつまでも岐阜城主で在らせられたら良えやないですか。天下取りは私が代わりにやったりしますよ」

「たあけ、おみやあなんぞが表に立つても直ぐに武田毛利にやられるで駄目^{かん}わ。何とろくしやあ事抜かしよる。儂^{わが}がここに城築いたんをこんぺいとう強請^{ねだ}る為やとでも思つとるんか」

「で、ございましたら柿位我慢^{えにし}しんさい。良好^{りょうこう}（後の織田信好）や縁^{えにし}（後の織田長次）やってそんな騒^{そわ}しい事ゆわへんですよ」

「能具没収されただけで家出したアホンダラに云われたにやー」

「息子と同じ土俵でもの語らんで下され！」信忠は喚いた。「直に五十なんですから好い加減天命を知るが宜しかろう。余り童の如き行いをなさる様なら蟄居^{せいき}させまする！」

「別心か！ 謀反起こすんなら受けて立つたるぞ」

「当主は私です！ 別心は父上でござろうが！」

「あのう……」襖越しに、怯えた侍女の声がか細く伝わって来た。

「御方様から、饅頭を御供え致しますゆえ鎮まり給へと……」

「やかましいわ、黙つとけ！」

信長が一喝するや、女は脱兎の如く逃げ出した。「待ちやあ、饅頭は置いてけ！」

「少しは控えなされよ、御体を壊しまする」

「おみやあも黙つとけ。好きなもん食つて何が体に悪いんじや」

「ものには限度つてものが在るんですよ！」

「五月蠅いわ。毎度毎度同じ事云いからかしおつてからに。飽きたー飽きたー秋田城介ー」

「力丸！」

遂に信忠が切れた。「その槍を寄越せ！」

「於力。 鬼武蔵は今日も元気だのう」

「長可を出すとは卑怯なり！」
チヨウカ

究極の二択を迫られた小姓、もりりきまるながつじ森力丸長氏は泣きそうな顔で兄長隆を見上げた。
もりぼうまるながたか

森坊丸長隆は、何かを諦めた目で弟を見、一回首を横に振る。

……その時僅かに開いた襖から、二人の兄、もりらんまるなりとし森乱丸成利が左目だけを覗かせた。己が弟の追い詰められた瞳を見、そつと襖を閉めて立ち去った。

師走からこちら多忙を極めた身に、これ以上の厄介事を背負う気はなかったのである。

「力丸！ 早うしろ！」

かくて正月一日から、安土では人生の岐路を決する戦いが行われていたのであった。

* * *

「……毎度毎度、目と耳に痛い城やね、ここは」

一方その頃隣室では、北畠信意が茶をすすっていた。

「如何程に城を飾り立てようとも人のたちは変わらぬ、と云う証左であるな」

神戸信孝も、相も変わらず豪快に茶を点てている。

「オウ、今の言葉、父上に奏上致しまする」

「何を申すか。 好い加減代われ。 疲れた」

「御前様が勝手に点ててたものではござらぬか」

「若様方、お待ちかねの饅頭にございます」 音も立てずに斎藤利治が現れ、

「オオ、して、何れが一番高価なものじゃ」

「坊、次はお主が点たてる番だ」

「エッ」

両手一杯に甘味を抱えた織田信房は硬直した。 これからの親戚付き合いに、つくづくの不安を感じながら。

破ノ序 七

「と、云う事がございましたね」

そう滔々とつとつと語り続ける目の前の人物に、明智十兵衛光秀あけちじゅうべえみつひではハアと気のない返事をした。

「まったく上様には自重と云う言葉を知って戴きたい。四十にして惑わずと云うが、あれではまるで童ではござらぬか」

「それは……難儀な事でございますなあ」

茶を勧めれば、信忠はまるで酒をあおるかの如くに一気飲みする。作法なぞ糞喰らえとでも云いたげなその様は、父信長によく似ていた。

「そも、近頃の上様は油断が過ぎる。たとい手前の城でござろうとも御自ら下郎に顔を晒すとは如何なものか。よしんば不屈者が紛れておれば何となさるおつもりか、その事でお咎めを受けるのは我等であるぞ」

安土の方から託された干し柿を食い干切つて、信忠は云い募る。

「安土殿も、何の為に此処へ移られたと思し召しやら。良人が羽目を外すのであれば奥が一層引き締めねばなるまいに、それをヤレ素面の酔人だのヤレ殿の気晴らしなどと。懈怠けたい許すまじと下々には普段のたまつておきながら己等が一番やる気がないのではなからうかと問い詰めとうございます」

「殿……よもや酒を飲んでおいではあるまいか」

光秀の控えめな指摘を、信忠は胡乱な目で撥ね除けた。

「日向守は私が正月から酒に漬れる戯けと仰るおつもりか」
ひゅうがのかみ
南無三と、心中で呟いたがもう遅い。

「よろしいか。私は春に武田攻めの大事を控えておるのだ。今は来るべき戦への備えを少しでも整えておきたいと云うに、斯様な瑣末事ばかりに気を取られていては勝てる戦も勝てなくなるではないか」
(これは確実に飲んでいる……)

信長も信忠も、酒が入ると手当り次第に絡む。彼等には断じて酒を飲ませてはいけないと云うのが、家中第一の掟だった。

そして、よりたちが悪いのは、なまじ酒に強い信忠の方である。

「いや、その前に上は儂が武田毛利にやられると云いおった。真に常識有る御方ならこれより戦に赴く息子に負けるなどと申すか、普通。御自分が縁起を担がぬのは結構だが他がそうであるとは限らぬのだと少しはおもんばかって戴きたい。そもそもアレだ、上は一度武田に大負けしておるのだから今少し慎重になられるがよろしかろうにそれを……」

「マア、落ち着いてくだされ」

愛想笑いを浮かべて、光秀は信忠を宥めた。

実を云えば、彼は早くこの接待を切り上げたくて仕方がない。昨年の暮れから妻照子ひさこが体調を崩し、その回復の祈願に出ようとした矢先の訪問であつたからだ。

「大將が不安を表に出すようでは兵卒がまとまりますまい。大殿の振る舞いも、殿の更なる鼓舞を願つての事」

「無い」信忠は云い切る。「儂を少しでも思い遣つてくださるならば新年早々安土の雑事を儂に丸投げして厩うまやになぞ立つものか」

そしてズイ、と光秀に詰め寄り、

「日向守は何故上をお止めくださらなかったのか」

「某それがしは……知らされたのが直前でございました故……」

「何と申さるる」信忠は大仰に嘆いた。「織田家筆頭の重臣である貴殿が主を諫める事も出来ぬとは」

「左様な事は柴田殿しばたや前田殿まえだに仰るべきでございましょう。某それがしは外様の一人に過ぎませぬ」

「権六ゴンロク（柴田勝家）はこの程度、憂うに値せずと云いおった。又左マタザ（前田利家）や藤吉トウキチ（羽柴秀吉）は駄目だ、彼奴等は上と一緒になつてやりからかす」

「それは、そうでございましょうなあ」

光秀は理解した。成程、だから秀吉は自分に信忠を託したのか。

「殿」

光秀は毅然と信忠に向き直った。

「人に山を動かす事が出来ぬ様に、世の中にはままならぬ事が多うございます。己の力では如何ともし難いものを、無理矢理歪めれば世の理が乱れますでしょう」

「だから何だ」

「諦めを覚える事も、人の世には大事でございます。大殿がああなものも全ては天の配分、それが世の理と思し召され」

「そんな大層なものか。日向守、御主逃げるのか」

「マア、目出度い席でございますれば……年の初めから打擲されたくはのうございますなあ」

「諫言も出来ぬ織田家とはッ。主として情けない限りであるッ」

床に突つ伏して慟哭する信忠だった。

「案じる事はございませんぬ」

心にもない慰めを口にして、光秀は畳から膝を浮かせた。

「大殿は某などでは到底及ばぬ思慮を持たれた御方、その大殿に加え丹羽殿や滝川殿たきがわ、何より殿御自身が居わしますれば、織田家の安泰は約束された様なもの。某が如きは唯々神仏に御家の安寧を祈願するばかりでございまする」

「待て日向守、其許は左様な甘言で儂を丸め込むつもりか。神仏に縋る前に人事を尽くそうとは考えぬのか！」

ソ、と立ち去ろうとした光秀の袴をむんと引つ掴み、

「先ず己に何が出来るかを共に語らおうではないか。出来得るだけの事を行い、しかる後に神仏に願ってこそ加護が得られると云うもの。試行錯誤を止めれば人間仕舞いであるぞ」

信忠は取りすぎる。彼もまた必死の思いであった。偉大な奇人を父に持ったが故の気苦労を、誰かに共有させたくて堪らなかったのである。

それを察せられない光秀ではなく、併しその思いを受け止めてやるうなどとは断じて考えない光秀だった。

そもそも酔人^{それがし}に何を云つても無駄である。

「はてさて某は朝（朝廷）に参らねばなりませぬゆえ」

「嘘を云えッ、御主、訪ねた時には寺に参ると云つておつたではないかッ」

信忠の罵声を背中に浴びつつ後を侍女に任せて、光秀は滑る様に部屋を離れる。

そうして己の孤立無援を噛み締める、織田菅九郎信忠、二六歳の春であつた。

* * *

ところで書状にあつたもう一方、田楽味噌の事である。

味噌田楽といえは、上方風の、茄子や白壁（豆腐）に柚子等で香りを付けた白味噌を塗りつけ焼いたものを想像されるかも知れないが、この場合は尾張の田楽味噌を指す。

まず赤味噌である。

塩辛い等と余所からは云われるが、その味の濃さが重要なのである。これに味噌と酒を少々、そして大量の砂糖を加えて火にかけて混ぜる。

この加えて混ぜると云うのが曲者で、少しでも水気が多ければ忽ち甘い味噌汁となつてしまふし、かと云つて味噌も酒も加えないではただの味噌の塊である。とりとなる寸前の加減が難しく、また銘々好みの別れる所でもあつた。

これを熱々の豆腐に掛け、口から湯気を吐きながら豆腐の旨味をひんやりと甘辛い味噌で彩るのが尾張の冬の嗜みであり、甘味と濃味が好物な安土城の主には欠かせぬ食材であつた。

美濃から齎されたこの妙味に信長はたいへん上機嫌で舌鼓を打ち、御台所は年頭からの出費に頭を抱え、この期に及んで上方の味覚に

一切慣れようとしないうちに光秀は天を仰ぎ、一益や勝家は沈黙し、秀吉は笑顔で御相伴に与りつつ、感想は保留とした。

庶民にとって砂糖と味醂は超高級品であり、味噌に砂糖と酒を混ぜるなど狂気の沙汰であるとうっかり漏らして池に蹴り落とされたのを、彼はしっかりと覚えていたのである。

破ノ序 八

「筑前守の出している倍の碌ろくを与えると云つたら如何とする」

指をびんと突きつけてくる信忠に、黒田官兵衛くろだかんべえ孝高はよしたかやんわりと返答した。「お断り申し上げます」

信忠は地団駄を踏む。「何故だ、私の隣に立つて天下の高みを臨みたいとは思わぬのか」

「我が殿の下に居りましても天下取りの御役には立てますからなあ」
その通りでございます、と口を挟んだのは孝高の主、羽柴はしばし藤吉郎とうきちろう秀吉ひでよしである。

「官兵衛を殿に渡してしまつては私が御役に立つ事が出来なくなつてしまいます。何卒、私奴に官兵衛を残して下され」

「そんな事はない」坐り直して、信忠は手に顎を乗せた。

目は据わり、視線は秀吉の先、山水の襖に向いている。

「お主は私よりも優秀であろう」

「とんでもない」秀吉は大袈裟に首を振る。「私如きがどうして殿に敵いましょうや」

「おべっかは結構」

唇の先を尖らせて拗ねる信忠に、秀吉は苦笑した。信忠の頬には朱もさしており、酔っているのは明らかである。三毬打と馬揃えを無事に終え、愈々正月も終わりと肩の荷が下りたのかも知れない。取り敢えず、機嫌が良さそうなのは良い事であつた。

尚、秀吉に彼を押し付けたのは光秀であるが、その意図については斟酌しない事とする。

「酔狂で成り上がった訳ではなかる。私の才覚などお主の足下にも及ばぬさ」それからいつと笑つて、「人たらしと呼ばれる程のお前さまだもの、優秀な人材は直ぐに集められるだろう。私には参謀が必要なのだ、其許一人で黒官クロカンも半兵衛ハンベも獲るのはずるいぞ」

孝高は洪面を作る。竹中半兵衛重治たけなかはんべえしげはるが死んだのは天正七年の事、

既に三回忌も過ぎている。

酔っている信忠は孝高の表情の変化に気付かぬ様だ。

「上様には参謀などは必要ありませぬでしょう」

「私が必要だと云っておるのだ」幼子の様に頬を膨らませて、猶も信忠は云い募った。「私には上様ほどの頭も器量もありはせぬ。所詮親の七光りで織田家の頭領に立てただけ、一人ではとても天下など治められぬさ」

何と云う事をおっしゃると宥めにかかる秀吉を意に介さず、信忠はたと孝高を見据える。

「だが私は人を見る目だけは持っているつもりだ。物心付かぬ内から、側廻りには常に一流の者達が控えていた故な。……知謀は一流人為は清冽、これを召し抱えずに何とする」

秀吉が、信忠の前に廻り込んで二人の間を遮った。雲行きが怪しくなりつつあるのを見て取ったのだ。

「マアマア今日の処はどうか私奴の顔に免じて許して下さい」

「その猿顔の何に免じるのだ」

秀吉を不服そうに睨めつけて、それから不意に、信忠は何を思いついたか彼を手招きした。

秀吉が寄るやその酒臭漂う顔を近づけ、

「お主、女は色白の方が好きか」

問うた。

意図を計りかね首を傾げると、「いやな、新五郎シンゴ（斎藤利治）が云つとったんやけど、越中の女は皆でえら色白で髪艶やかで異国と見紛う妙女ばつからしいんだわ。でよ、労いとは云わへんけど黒官を儂に呉れたらおみやあさんに女二、三見繕つてやるでよ……」

「殿、いくら何でもそれは云い過ぎでございます」

流石に秀吉も不快を示した。稀代の武人を、女と引き換えにしろと云うのか。

「はやけどお主、子が居らんがや。このままでは北畠や神戸の如く於次おつく（後の羽柴秀勝）に家を乗っ取られてしまうぞよ」

於次と云うのは信長五男、於次丸の事である。子のない秀吉が一昨々年に信長に請うて養子とした子供であつた。今現在秀吉の唯一の『子』であり、このまま秀吉に子がなければ 否、たとい出来たとしてもおそらくは 彼が羽柴家は継ぐ事になる。既に信意や信孝が通過した道だつた。

当然秀吉もその事は承知しているが、だからと云つて代々子宝に恵まれまくる織田家に指摘されるのは中々癪な事 などは口が裂けても云わないが。

「折角ここまで名を挙げた羽柴家を潰したくはあるまい。一方黒官が誰の下で働くも畢竟織田家の為、だから、な、ここは大人しく黒官を儂に渡して子作りに励むが良い。それともおみやあさん、野郎の方が好きやつたか？」

「いえ、女子の方が好きでございまする」

「だらあ（そうだろう？）」「即答した秀吉に、嬉しそうに頷く。

孝高が咳払いした。

「……ここに殿が奥方様へ書かれた書状がございまする」

二人が顔を向けるのを待つて、孝高はおもむろに懷を探る。

「アー、……この度の不足の事、偏にたうきちの責なれば、仰せのことく、柱にくくり笞をあたへ候もつつしんでうけたまわつて候（中略）また三たび同じふるまいを致したれば、うえさまに奏上の上たたきにして万遍土下座に読経写経いたし候（更に略）そちはあいもとめがたきあひたに候て、たた？？つつしんで、ゆるしをあい求め候……」

訥々と読み上げられる掟書きを惚けた顔で聞き終えて、それから秀吉は慌てて信忠に目を向けたが遅かつた。

「いや、あのう どうか大殿には云わんで下され！ 股を焼き討ちされるのは嫌じゃあ！」

信忠はたいへん哀れむ表情で秀吉を見遣り、それからお主も大変であるなと感慨深く呟いて、何度も何度も頷いた。

「解つた。儂はもう何も云わぬ。では黒官よ、私の下に来たくなれ

「は何時でも歓迎するぞ！」

一人納得して去り行く信忠を笑顔で見送って、秀吉は孝高を睨めつける。

「官兵衛……覚えておれよ」

孝高は受け流した。

「どうせ酔った間の出来事、酒が抜ければ覚えてなぞおりませぬよ」

破ノ序 九

…… 虫の知らせ、と云うものがある。

あるいは祖霊の導きか、それとも本能によるものか、根拠はないが確信が、けっしてそれに近づいてはならぬと信房に告げる事がある。

廊下の端に立ち尽くして、しかし織田信房は一步も進む事が出来なかった。

正月十七日の床は、冷たい。早く呼ばれた部屋にすべり込んで火鉢を前にぬくくしたかった。

が、信房は後ろの小姓を振り返って、云った。

「岩丸殿 いわ 御免！」

併し岩丸の対応の方が早かった。「辰千代！ たつちよ」

信房の背中を、辰千代の投げた投網がからめとる。網で自由を奪われた状態ながら、信房は抵抗した。手足をばたつかせて小姓達を払いのけ、這って階段まで辿り着いた処で、ぬつと現れた黒い影に信房の体は軽々と持ち上げられた。

「犬山殿 いぬやま、捕らえたり」

「大儀であつた」

襖越しに、信忠の声だけが響く。「源三郎、無駄な抵抗は止めて大人しく来りやれ」

部屋に放り込まれればそこには肩衣半袴が三人、一人は信忠、後の二人も信忠と同じ年頃で、一人は細目細面の如何にも京人と云った風の優男、もう一人、先程信房を抱え上げたのは目鼻立ちのくつきりとした、一度見たら忘れられぬ雰囲気を持つ男であつた。

信忠が口を開く。

「さて、源三郎、なにゆえ自分が喚ばれたか心当たりはあるな？」

「さて…… とんと」恍けてみたが、心当たりは大いにあつた。

「そつか」信忠は他の二人に目配せし、「お主つい先頃、勝蔵 ショウゾウ（森

長可)の茶に招かれたな」

やはり、と信房は無言で項垂れた。

「そこで濃茶を一人呑みしたのだそうだな」

「……左様でございます」

「お前武田でどう云う教育を受けたんだ」信忠は頭を抱えた。「芸事は習わなかったのか」

「否、一通りは学んでおります」

信房は必死に言い繕った。「吾妻鏡も源平盛衰記も諳んじられま
すし、三十六歌仙くらいならば何とか申せます。茶の湯も、これ
まで公で無礼を働いた事は一度もありませぬ」

「勝蔵の席は公とは云わぬのか」

「その、森殿は……義兄上でございます、し?」

信房の室は池田勝三郎恒興の娘、森長可の妻も池田の娘であるか
ら、長可とは奥繋がりの義兄弟である。

「ほう、兄であれば礼儀は要らぬのか。ならばうぬは儂が相手でも、
同じ様に振る舞うと申すのだな」

そのような、と答える声は自然と萎む。信忠が溜息をつき、

「良いか、真の教養とは常日頃の行いから滲み出て来るものだ。日
頃卑しい振る舞いしかしておらぬ者が取繕った処で、その性根まで
は隠せはせぬ」と、云う訳で、だ」

後ろの二人を振り返る。

「本日はお主の為に一流の先生方を御呼びした。先ず向かって右に
居わすが細川与一郎忠興。ほそかわいちろうただおき丹後国領主、細川藤孝が嫡男であらせら
れる」ほそかわふじたか

信忠は細面の男を示し、それから、信房を抱え上げた男の方を示
す。

「左に居わすのが蒲生忠三郎賦秀、私の義弟にあたる」がもつちうしゅうすけ

信房は賦秀(後の蒲生氏郷)の顔をしげしげと眺め、次いで信忠
のもう一人の義兄弟である長可を思い浮かべた。

「……個性的な御兄弟を御持ちであらせられますなあ……」

「云つておくが、忠三郎の室はお主の姉だからな。お主も忠三郎の義兄弟であるからな」

心中の声は喉をあつさり通過していた。恥じ入って小さくなった信房を、賦秀の生暖かい視線が注した。

ちなみに、信忠の側室の一人は長可の妹である。こちらもまた奥繋がりの義兄弟である。

「この二人は何れも当代随一の教養人、一挙手一投足にもその典雅な振る舞いが見て取れるだろう？」

信忠はそう云ったが、信房には前の二人からこれと云つて教養を感じ取る事は出来なかった。二人ともただ坐っているだけなのだから当然だが。

「まさかこの為に私を山崎から呼び戻されたのですか」

信房の視線を受けて、細面の方　忠興がうんざりした調子で声を上げる。

うん、と信忠の返答は明快だ。

「だって此奴、茶席で濃茶一人で飲みからかすわ裸足で外を駆け廻るわ大概しよるでな。お主等もそんなオタンチンが上に居ったら嫌だろう」

「とは云え私は御家を継ぐ様な立場でもございませんし」

信房は肩を竦める。そろそろ話に飽いて、先ほどから畳の目を数え始めていた。

「武士の本分は飽くまでも武でござりまする。未だ戦働きもまともに成らぬ内から茶だの歌だの、それこそ他に為すべき事があるだろう、と」

「そのよく廻る舌こそ他の事に使つて欲しいものだ」

信忠は微妙に行き来する信房の視線を厳しく見据え、

「良いか、お主が他人の前で恥をかくのは知った事ではないが、お主の恥は即ち家の恥、左様な小汚い小袖を衆目に晒して笑い者になるは織田家であるぞ。それだけでなく、お主を育てた武田家の名をも貶める事になるのだ」

それを聞くや、俄に信房は態度を変えた。ぴんと背筋を伸ばし、僅かに唇を嚙んで、睨む様に信忠を見詰めた。

「解りました。なれば、私に左様な教えなど必要ない事を証明致しますようぞ」

「よくぞ云った」

だがそんな事は無理であると、信忠は確信していた。忠興も賦秀も間違いなく一級の風流人、甲斐育ちの田舎武士が教養で太刀打ち出来るものではないのだ。

実を言えば信忠自身しばしば二人から諫言を受けているのだが、それはまた別の話である。

「織田家の男たる気概、とくと見せて呉れよ。二人は共に京の人間、その所作を見習えばこれからの付き合いに大いに役立つ事請け合いであるぞ　だがまあ取り敢えず」

信忠は信房の頭をがっしと掴み「先ずはその糞汚い小袖を何とかしろ。儂の目の黒い内は斯様な襷袢ほろを纏った者を与力とは認めんからな」

もつとも、信忠の今回の試みは失敗に終わった。茶の湯の最中に信濃の怪談話を始めた信房に賦秀が喰い付き、忠興もそれに引き摺られたのである。

「時に殿、オタンチンとは何でございましょうか」

「すぐごと着替えに去った信房を見送ってから、忠興は信忠を振り仰いだ。

「え、莫迦、と云う意味だが」

「殿、……どうか人前で話される時は御国言葉は使わないで下さいませ」

「良いんだよ私は」忠興の視線を、併し涼しい顔で信忠は受け流した。「公私の別はシツカと付けられるからな。少なくとも公の前で御国言葉を使った事はないぞ」

「……紛う事なき兄弟だな」

忠興の呟きに、賦秀もまた深く頷いたのだった。

破ノ序 十

「ちよいとそのアニイさんや、儂と茶アでも飲まんかね」

「茶の湯の事不知案内、ふあんないにつき白湯を所望致す」

「じゃ、歌でも詠もまい」

「れんが聯歌の事不知案内。ふあんないにつき肝練りならば付き合つど」

「何じゃ、付き合い悪い奴っちゃな」

背後でぶつくさと文句を垂れる与兵衛を振り返り、城八郎は唇をひん曲げた。

「何だ、結局ワイ共も来ったかよ」

場所は安土の桑實寺、くわのみでら正月も終わりの今は人出もすっかり落ち着き、木々は寂しく枝を揺らすばかり、眼下に広がる光景も大変侘しいものだ。時期外れの参拝客三名は社殿を後にし、ゆっくりと山を下っていく。

「おまあさんは本当、喋ら無んだら女で通じん（通用する）のになあ」

与兵衛が心底残念そうに呟きながら、とよはその後ろで例によって餅を口に含みながら。

「何や誰かと話したみたいやけど、誰やね、アレ」

与兵衛が来た道を振り返って問う。山を下る背中が、丁度木々の間に消える処だった。

「なかむらちちよつへえ中村長兵衛うちゅう男じゃ。俺が今居候して申す」

「こないな処で何してはったの。山王はん詣でへんかったん？」

「いひせう喧しか」

迷った揚句に辿り着けなかったのだとは、城八郎の誇りにかけて云えなかった。そもそも城の場所は繰り返し叩き込まれたものの、山王とやらについては何一つ教わらなかったのだ。

お前達はどうだったのかと問うと、とよはうつとりと相好を崩す。「右府さまが今年も鯨肉持って来て呉れはってな、吉田（兼治）は

んが居いひんかったさかいウチがもろたんよ。旨かったどすわア」
「何だあ、此処^{こけ}じゃ鯨肉ばそげん珍しかもんか？」

次いで問うた与兵衛の答えは「寝とった」と簡潔だ。

「寺の大掃除の人足に駆り出されただけやったでな。餅喰って酒呑んで、あとゴロ寝しかしらんでよ」

「……ワイ等、覚えちよれよ」

無然とした表情の城八郎を仰ぎ見て、与兵衛は小首を傾ける。

「何じやい、日向守に信書渡せへんかったんかね」

「渡した」城八郎は睨む。「が、おもっさま（思い切り）厄介^{やっけ}な顔され申したでごわんさあ」

やらあな、と頷く**与兵衛**の表情は、予想通りとでも云いたげである。

「……ワイ、俺に厭^{いや}な事押し付けよったな」

「まあええやろ。これで日向守の記憶には間違いなく残ったやろで」
「やぞろし。てげてげいいいよっとうったくつど」

与兵衛は二、三度瞬きし、それからとよを振り返った。「悪い。通訳して」

「日向守はまに御拝謁出来てまことに嬉ふーゴザイマヒタ。これからもっほ努力ひて城持ち大名になれたら良いなアとオモイマヒタ。おわり」

寒風に身震いし、意地でも餅を噛み続けながら喋る娘である。

「……もうよか。疲^だれた」冬の所為^だだけではない寒さに背を丸くして、城八郎は頂垂れた。「で、何ばしに来ったよ。馬揃えばすつばい終わつとつど」

「せやね、じきに武田に行かはるからな」

風に乗って、とよの澄んだ声はよく響いた。

城八郎は振り返る。

「昨日、とうとう左馬頭^{さまのかみ}（木曾義昌）が右府さまに降ったそやさかい。
武田征伐の始まりやね」

破 一

織田家と武田家の因縁は永禄年間、信長が美濃国を制圧した頃に遡る。

美濃は東が信濃と国境を接しており、信濃山中から流れる木曾川が濃尾平野の主要な水源の一つでもある等、殊に東美濃にとっては信濃の存在感は大きく、明智、遠山等東美濃の一族は斎藤家の勢力下にある一方で武田家の影響下にもあった。

信長は美濃制圧の目処が立った永禄八年、遠山家の娘を養女として武田勝頼に妻合わせ誼を結び、更に続けて奇妙丸（織田信忠）と信玄五女（松姫）との婚約させ友好関係を築き上げた。

武田家は百万石を越える東国最大級の勢力、且つ河内源氏の流れを汲む名門であり、当時の織田家がどう足掻いた処で勝ち目のある相手ではなかったのである。

その方針が崩れたのは元龜三年、信玄が時の將軍足利義昭の求めに応じ上洛を開始した事に因る。信長包囲網の形成である。

結果としてこの包囲網は信玄の死と共に瓦解し、義昭は下洛、室町幕府は事実上滅亡したが、以来両家の絶縁関係が解消される事はなかった。

天正三年の長篠の合戦、同年の岩村城再奪取で織田家が優位に立つてからは信濃衆の調略に努め、そうして遂に今、その努力が実を結んだのである。

二月一日、木曾義昌は弟、上松義豊を菅屋長頼の元へ送り、信忠へ恭順の意を示した。これを知らされた武田四郎勝頼は軍令を発布、武田信豊率いる先発隊五〇〇〇を出し、更に自身を総大将とする一万五〇〇〇を動員した。これが二月二日の事である。

二月三日、信長も動員を発令、森勝蔵長可、団平八郎忠正等の先鋒隊が岐阜城から木曾谷へと向けて出陣する。

総大将織田菅九郎信忠、軍監に滝川彦右衛門一益、本隊は河尻与

兵衛秀隆他、飛騨からは金森五郎八郎長近、駿河からは徳川次郎三郎家康等を擁する大軍が、甲州に向けて動き出したのだ。

武田征伐の始まりである。

破 二

その城は霧の中、恵那の山中に抱かれる様にして四〇〇年の時を見下ろしていた。

遠く山の頂に、岩村いわむらの城が建っていた。

馬の背に揺られながら、織田信房はその靄のかかった威容を眺めていた。

嘗ては苗木遠山家の城、一度は武田に穫られたが、今は河尻秀隆が城主となった城である。

二月一二日、信房は兄信忠ねんししゅうの連枝衆おがさわらのぶみねの一人として、岐阜城を出陣した。その翌々日の今日、小笠原信嶺の降伏の報せを聞きながら、一行は岩村に入った。

武田はもう終いか。

せわしなく行き来する馬廻衆に視線を移しながら、暗澹たる気持ちで信房は考える。木曾義昌、小笠原信嶺……織田の調略に応じたのは何れも武田の譜代とも云うべき者達ばかり、義昌の正室は勝頼まりの妹の真理姫であるし、信嶺は逍遙軒しょうようけん勝頼の叔父に当たるの娘婿である。

家中の動揺は如何程のものか。

織田家が進軍を初めて早々。六日には滝沢しもじょうのぶうじの下条信氏が弟の氏長うしながに放逐されて落ちた。九日には後詰めとして信長以下明智、丹羽、筒井、細川、蒲生が出陣する旨条々発布された。これは直ぐに武田側にも伝わるだろう。信忠の軍団と合わせ、その数総勢一八万に及ぶ動員である。

「懐かしいか」

馬を下り、陣を広げた処で掛かった声に振り向いて、信房は頭を垂れる。「……否。さほどには」

「別に遠慮する事はないぞ」織田信忠は笑った。「幾年かはここで過ごしたのだ、当然何がしかの思い出はあるだろう」

六つの時まで、信房はこの城に住んでいた。この城の主だった苗木遠山家に養子に入り、本来ならば岩村は、信房の城となる筈だった。

「ほんの童の頃の事でございますれば」

あきやまげんえもんじょうのぶとも

城は武田方の武将、秋山膳右衛門尉信友によって落とされた。その前後の混乱を、信房はありありと思い出す事が出来る。援軍の望めぬまま、籠城同然で冬に向かう城、信友側から岩村殿　信房の養母　への婚儀の申し入れ、それに対して紛糾する遠山家中、輿入れを決めた養母や織田掃部忠寛の表情、そのまま城で暮らせると云う約束は反古にされ、霜の下りる明け方に甲斐へと送られる腰の中で見た霧で霞む城。その霧ヶ城の姿が、信房が最後に見た岩村であつた。

城は天正三年、長篠合戦での勢いそのままに信忠軍が陥落させた。城の者達の救命を条件に降伏した信友は長良川で逆磔にされ、正妻となっていた岩村殿と信友の重臣も連座した。城に居た武田兵は撫で焼きにされ、最期に、信房の嘗ての養母、信長の叔母であつた夫人はこう叫んだと云う。

『我は女の弱さから斯くなりしを叔母をかかる非道の目に遭わせるとは。信長よ必ず因果の報いを受けん』

信忠を呼ぶ声がした。しばし感傷に浸るも良からうと云い置いて去って行く兄の背中を見つめながら、信房は深い溜息を落とした。

破 三

「……城介事若くて候て一人粉骨をも尽くし名を取る可と思う気色相見え候間、毎々卒璽の儀これあるべく候、信長出馬之間はむさと先へ越さざるの様、堅く申し聞かすべきに候……」

翌朝。朗々と書状を読み上げる滝川一益の声を、岩村城の上段の間で、信忠は鼻をほじりながら聞き流していた。

「……御耳は傾けて戴けておりますでしょうか？」

「ああ、うん、無理」

（云い切りおった）

思わず引き攣った頬を紙で隠して、声だけは穏やかに一益は続ける。

「勝頼はたいそう戦上手の者、率いるは一騎当千の赤揃え。深追いは無用、油断は大敵、後詰めを待ち、大軍を以て押すべき、との大殿の御言葉にございます」

「であるか、であるか」

「デ、あるからにしては、殿が斯^かくの如く馬を進められまするは、僕^{やつがれ}にはいささか逸つておいでの御様子に見受けられますが……」

「是非もなし、是非もなし」

「殿」一益は顔を上げた。「真面目に聞いて下され」

対する信忠は中空に視線を漂わせたまま、頬の廻りだけニヤニヤと緩めている。

「真面目も真面目、儂は何時でも大真面目よ」

「殿、朝餉の用意が調いましてございます」「応、今行く」「殿！」

「朝っぱらからよくもマアそんな大声が出せるな」うんざりそうに一瞥をくれて、信忠は席を立った。「こんな糞寒い処で声を張り上げてると喉を潰すぞ。もう年なのだから」

「御心遣いまことかたじけのうございますが、でしたらばどうか僕^{やつがれ}の言葉を御聞き下され」

「厭いやだよ」

あつさりと云い捨てて信忠は去る。慌てて一益も随いて行くが、振り返りもしない。

「何ぞ上を待たねばなんのだ」振り返らないまま、彼は云う。「わ、し、ら、が、本隊だ。折角皆がやる気になつておるのに態々それを殺いでやる事もなかつた」

木陰に雪の白さが目立つ中、諸將一同は足輕に混じつて中庭で朝食をかき込んでいた。あの霧に塗れた寒さの中に入るのかと一益が内心げんなりしていると、穴倉まで至つた処で信忠が振り返る。「寒さが辛いならお主は中で食えば良いぞ」

「御氣遣い結構」

そんな事を思い遣つてくれるならば、是非とも大殿の諫言を容れて欲しいものだ。

一益は必死だった。何せ先の書状の最後には、信忠の補佐を仕損ずれば二度と信長への対面がならぬ旨、しっかりと記載されているのである。

「……勝蔵、朝から汁粉じゅうこなは……胸焼けせんのか？」

「否、別に」

そんなのどかな会話を繰り広げる信忠が正直憎らしく、朝食に汁粉と米と一緒に食べる森長可の太々しい面が憎くて堪らない。

今から思えば、信忠の軍監に任じられた際に、妙に河尻秀隆が優しかつたのは、多分にこの事態を見越しての事だつたのだろつ。

（殿がこれ程傾かぶいた御方だつたとは）

父親があの信長とは思えぬ程、普段の信忠は道理をわきまえた好人物　の筈だつた。

何事も無茶をせず、突出せず、だからと云つて臆病でもなく、良く人の意見を聞き、家中が望むものを望む様に与えてくれる、非常に有難い当主と思つていた、のだが。

「さて皆の衆」

芋幹汁いもがじゅうなど啜りながら、信忠は一同を見渡す。「各々知つてい

事とは思つが、昨日小笠原掃部大夫が我等に降つた」

おがさわらかもんだゆう

長可がこれみよがしに舌打ちした。

「掃部大夫の言葉の通りならば武田は既に死に体、上からは御覽の通り」

信忠は一益から書状を引つたくつて一同に掲げる。「重々油断のならぬ様仰せつかつておる。各々方、ゆめ足下を掬われぬ様気張り候へ」

それからニツと笑い、「先鋒は変わらず武蔵守（長可）、平八郎（団忠正）で行く。お主等、出端を挫かれるなよ」

「承知仕つてござる」

「殿お」

昔、上月城で兵を率いていた時は斯様であつたかどうか、一益は困惑しながら思い出そうと務めたが記憶になかつた。

長可と云えば織田家の狂犬、とかく揉め事を起こさなければ気の済まない人物である。進むなと命じられているのに、態々野獣を放つとは。

せめてと忠正を視線で諫めたが、忠正もどちらかと云えば長可寄りの質を持つ男である。怪訝そうに眉を寄せると「否」とでも云いた気に口の端を引き下げる。

「何を嘆いておる。敵地に最も近い知行を持つものが先達を務めるのは普通だろうが」

信忠は可笑しそうに云うが、それに承服しかねるのは何も一益だけではない。坂井や河尻の息子の表情が、その事を如実に表していた。

「先鋒は変わらず行く」

だが、信忠は、はつきりと繰り返す。「断じて今の勢いを殺いではならぬ」

破 四

その時まで、森長可はたいへん機嫌だつた。

昨日、深志城近郊にて武田方の首級四〇ばかりを挙げた。小笠原信嶺の案内で敵兵を　　雑兵とは云え　　見付けた時には驚喜したし、それを森家で独占出来たのは誠に目出たい事であつた。要するに小笠原の報告を秀長（河尻肥前守）や長秀（毛利河内守）に教えなかつた訳であるが、その事で信忠から受けた叱責も、長可の機嫌には影響を与えなかつた。抜け駆けだろうが何であろうが、世の中手柄を立てた者が勝ちなのである。

併しその翌日　　つまり今　　河尻、毛利が取つた行動は許し難いものがあった。

前日、信忠からは、河尻、毛利、森等で飯田城を落とせ、と云われた。少なくとも長可が軍議で仰せつかつた命令はそうだつた筈だ。確かに耳はそう聞いた。間違いなく聞いた。で、あるからして命令通り準備をし、命令通り進軍し、命令通り攻撃を始める筈だつた。にも拘らず。

「おやこれはこれは鬼武蔵殿、大変ごゆるりと参られましたなあ」
下卑た笑いを受かべる秀長を斬り殺して良いものかどうか、長可は真剣に思案した。

「いやいや叔父上、武蔵守は我等に手柄の機会を与えて下さつたのでしよう。でなければ一番槍が何よりも御好きな武蔵守、何ぞ遅れる故がありませんや」

目の前に在るのは細く煙のたなびく飯田城、長可を囲むのは青白い顔で自身を伺う宿老各務清右衛門元正を始めとする一門衆と、してやつたりの態度が滲み出る秀長達。

秀長の言葉に被せる様に長可を庇つた長秀も、唇の端が隠し難く吊り上がっている。

「ナルホドナルホド、云われてみれば確かにその通りであるな。イ

ヤハヤ拙者、とんだ間の抜けた事を申しましたわい。鬼武蔵殿どうか許してだされ」

わざとしか思えぬ棒読みで白々しい台詞を吐いてから、二人は哄笑する。未だ寒さの厳しい信濃の乾いた空に、彼等の声はよく響いた。力ずくでそれを止めてやりたい衝動に駆られながら、長可はゆつくりと口を開いた。

「なにゆえ、飯田城が、落ちて、おる、のか」

その問いを耳聴く聞きつけたのは、坂井越中守である。さかいえつちゅうのかみ

「何故とはまた可笑しな問いをなさる。昨晚の軍議を聞いておらなんだのか」

聞いた、と返せば、ならばそれに従って進軍したまでと反駁される。

「斯様に遅くの刻限に城攻めを行うなどとは聞いてはおらぬぞッ」

既に日は落ち十六夜の月は天の頂高くに白々と輝いている。恐らくは日が山に隠れると同時に攻撃を始めたのだろう、一言でも伝令があれば、夜討ちと云う大一番に長可が乗り遅れる筈がなかった。

山野を惑う落ち武者共の首級を一〇程挙げた処で、そんなものは断じて武功として認めたくはない。

併し伝えなかった筈はないと、一同口を揃える。森家のもの以外は。

「……謀ったな」

「何を申される」だが秀長の表情が、彼の言葉を裏切っていた。

「……驕るなよ。たかが城一つ落としただけの事、侍大将ならば至極当然の仕事であらうが」

「御自分が遅参なされたを、我等に当たり散らすとは見苦しい。功を妬んで人を罵るよりも御自分の不甲斐なさを責めるべきではございませんか？」

「テメエは何の手柄も挙げとらんやろがッ！」

愛槍人間無骨にんげんぶこつを振り上げて越中守に躍りかかるも、家臣達が取り縋り、脇を抱えて食い止める。その隙に越中守はひらりと逃げて、

ニヤニヤと取り押さえられた長可を眺め廻した。

「殿、陣中でござる。陣中でござるぞ！」元正が叫ぶ。

ずん、と重い音を立てて、人間無骨が地に刺さった。信忠の小姓、清蔵が長可達の方へやって来たからだ。

「河内守様、肥前守様、殿が呼びでございます」

「様ア見させ。殿に咎叱られて腹ア切れや」

長可は嘲笑った。

ところが、彼の願いは見事に裏切られたのだった。思いの外容易に城が落ちた事にたいへん機嫌を良くした信忠は、秀長、長秀等を大いに褒めそやしたのである。

「何なんや彼奴等は。糞腹立つげ！」

手近な小枝を斬り落しながら、長可は吠えた。主の意を汲んだ愛馬百段も天に向かって嘶き、信忠の陣の中でそこだけが、戦の後

にそぐわない殺気に満ち満ちている。

「あー、今回に限り、先に抜け駆けした武蔵守の方にも非があるやもしれぬなあ、と考えてみたり、みなかったり」

「そんな鈍くさい奴等が駄目のやろがッ」諫めた関小十郎右衛門成政に槍の先を向けながら、長可は反論する。「ネチネチネチネチ馬揃えの事恨みよつて。大体何で彼奴等は咎められへんのや。可怪しいげ！ 城は良くて雑魚はアカンのかよ」

そこでふと長可は押し黙った。部下達が固唾を飲んで見守る中、長可は首を上げ、さわさわと擦れ合う木々の葉を眺めた。

「……ここから割と近くに逍遙軒（武田孫六信廉、逍遙軒信綱）の城があつたよな」

「殿？」

ぎよつとする一同を尻目に、長可は薄く微笑んだ。

さつと持ち歩いている矢立を筆を取り出す。

「と、殿、何をなさるおつもりで」

「大島城乗っ取って候、と書く。それを殿（信忠）へ御届けせよ」

元正以下、家臣達は一瞬惚け、それから意味を解して肝を潰した。

「何を仰られる。大島城は未だ物見さえ出ておりませぬぞ」

元正が上擦った声で抗議をすれば、長可の祖父、はやししんえもんみちやす林新右衛門通安も同調する。

「虚偽の報告は軍令違反、流石にそれは拙かるう」

軍令に背けば切腹は免れない。

「虚偽？ 何が？ 今から攻め落とすのだ、順序が逆でも結果は同じ。何も、問題は、無い」

「然り、然り」

「いや、あの、ですから、攻め落としてから……」

「あーあー聞こえーせん聞こえーせん」耳を両手で覆って、長可はそっぽを向いた。「攻めとるつもり、では連中が付いて来るかも知れへんやろが。あんな阿呆達等と馬を同じくするなんぞ今生の屈辱、どうして耐えられようか」

「まったくもって仰る通り」

「五郎右衛門、黙れ」

離し立てる武藤五郎右衛門兼友むつじうごうえもんかねともの足を踏みつけて、元正はなおも云い継ぐ。

「流石に嘘を伝えられたとあつては大殿（信忠）も御怒り遊ばすでしょう。大殿の逆鱗に触れる覚悟がおりなのか」

「それが森家の宿老の御言葉か」ぐつと詰まった長可の代わりにむきになったのは、何故か兼友であった。

「坂井の小倅奴に侮られたのでございますぞ。たとい戦に負けようとも、坂井に軽んじられる事だけは耐えられませぬ。武者働きで死ぬるは本望、今こそ大手柄を挙げて彼奴等の鼻を明かしてやりましょうぞ。それでこそ森家の士ではありませぬか」

「……いや、だからな、問題はそこではなくて、軍令に背く事なのだが……」

「ええい鬱陶しいわ！」敢然と長可は立ち上がった。

「俺は二度と奴等の後塵は拝さぬ。良か！ これより我等は大島城に向かう。夜の明けきる前に城を落とすのだ。人の後ろに甘んじる

臆病者なんぞ家には要らん！ 今より暇を遣わす、帰れ！」

その一言で、総大将への虚偽の注進を持たされた小姓が走らされ、森家の面々は直ちに具足を整え、夜を徹しての行軍をする事になった。元正や通安が密かに遺言状を認め、懐にそれを納めながら。

破五

「かくて、我等一門が大島城を乗っ取りまして候……」
その口上を述べる間、各務孫三郎は一心不乱に地面を見つめ続けた。

総大将、織田信忠は何も云わない。視界の端に僅かに映る信忠の具足は微動だにしない。

孫三郎の背中からは、季節外れの汗が滝の様に流れている。

「く、首級は追って御持ち致しますゆえ、今しばらくお待ちを！」
上擦った調子で云ってから、頂垂れたまま信忠の言葉を待つ。しかし信忠は沈黙したまま。風の凪いだ未明の、妙に生温かい空気を背負いながら、孫三郎は静寂を耐えた。

やがて、

「……今しがた、大島城に遣った伺見が帰って来た処でな」

（ああ、終わった……）

自分の人生の終焉を、孫三郎ははつきりと自覚した。

思えば心残りの多い人生であった。鬼兵庫の縁者として、せめて初陣は迎えたかった。武家に生まれながら敵の首級一つ挙げられず、討たれて死ぬ事も出来ずでは、あんまりではないか。

袖で覆って泣き濡れたい気分であったが、せめて最期の勤めだけは果たさねばと唇を噛み締める。どうか己の命を以て、父や主人まで腹を召す事のない様にしなければ……。

「……お主、聞いておるのか」

「覚悟は出来ております」右手が小刻みに震えるのが自分でも可笑しかった。地に擦り付けた頭が、ジンジンと脈打った。「しかしながら此度の事は、偏に大殿の為を思ったが故の行動でございます。殿を御止め出来ませなんだのは我等の責任、腹を切る事に異存はございませぬが、何卒、何卒我が殿だけはお赦しく下さいませ」

「何を云っておるのだ？」

信忠が怪訝そうな声を上げる。

孫三郎はまたいた。

「……城の事、で、ございましょう?」

見上げた信忠もまたたいている。

「だから、大島城を落としたのはお主等なのであろう?」

「え?」

「……え?」

* * *

長可達は歩いた。

飯田城から三、四里（約一四km）、山脈と山脈の隙間を天竜川

おおしまはちろうむねつな

沿いに上って行く。大島城は平安時代、大島八郎宗綱が築いたのが
始まりの、由緒ある城である。東側が天竜川に面した大地の先端部
に築城されており、付近一帯では最大級の規模を誇る。武田家に典
型的な平城の造りであり、本丸、二の丸、三の丸の三つの城郭と堀
を持ち、北と東は帯曲輪^{くわわ}、西側は丸馬出、三日月堀、空堀を以て防
御は抜群であった。

そこ迄の道のりを、長可達はほぼ休みなしで進軍した。付き合わ
される足輕達にはいい迷惑である。が、長可とその愛馬だけは、進
むにつれ益々意気盛んになった様子であった。

「城を獲れぬ時は一同命はないものと思え!」

長可の檄が、馬糞の燃える夜の道に飮する。城下は既に焼け落と
されているらしく、武田方が迎撃の準備を整えつつあるのが目に見
て取れた。

「あれが、大島城にございます」

やがて、天神平の先端がはつきりと見える様になった処で、長可
は停止を命じた。人と馬に休みをやり、ここで漸く物見を出し、朝
駆けする旨を各人に伝える。見張りを置き、息を詰めて大島城の様
子を窺った。

不思議にも、大島城には火の気がなかった。しんと闇にとけ込む影があるばかり、人の動いている気配もない。

さてはこちらの動きが漏れているのかと更に付近に物見を出しても、奇襲を企んでいる風でもなし、不気味な程の静けさである。

「これは一体どうした事か」

長可達が訝しんで相談を始めた時、

「大島城より帰参致した物見ものみからでございまする」

一同、身を乗り出して話を来くと、物見は困惑した調子で語り出す。

曰く、大島城には人っ子一人居らぬ事。

曰く、辺りを搜索してみたが、兵や馬の影もなく、城下の者も含めて掻き消えてしまった事。

曰く、更に一帯を窺ってみたら、井戸の中に身を投げた女共の死体が在った事。

「……これは……つまり？」

既に城は放棄されていたのである。

大島城は先に長可の云った通り、確かに逍遙軒しょうようけん信綱等が立て籠っていた。

しかし一六日、飯田城が織田軍に落とされ、もはや抗するは不可能と悟るや戦意を喪失し、夜のうちに城を棄て甲斐へと撤退したのである。中には自ら城下に放った火を織田軍の火縄の焰と勘違いし半狂乱になる者も居る有様であった。

元正を始めとする重臣一同は心の底から安堵の息を吐いたのだが、憂さ晴らしをし損ねた長可が仏頂面であった事は、云うまでもない。

破 六

「穴山玄蕃あなやまげんばの家のものが掻き消えた、と……」

物見の口上を、武田勝頼たけだかつよりは呆然と繰り返した。

「梅雪斎はいせつさい（穴山信君、玄蕃）御自身の行方も知れず。逃げたか、はたまた離反か」

周囲が一斉に騒めく。

二月二十七日、信濃国諏訪は上原の陣。

既に織田信忠は陣を飯田に移し、小笠原信嶺を案内とする軍勢は信州の奥深くにまで進んでいた。木曾義昌が率いる軍と勝頼方が、現在戦闘状態にある。一方甲斐、駿河方面は徳川勢に加え北条も兵を出し、こちらも徐々に領内を脅かしている。

武田方は飯田城を放棄した保科越前守正直等ほしなえちぜんのかみまさなおが続々と高遠の城に集いつつあり、いざ高遠の地で決戦と、構えていた矢先の事であった。

情勢は間違いなく織田家の有利だった。それは勝頼も感じている。侍大将のみならず地下間人までもが自ら家に火をかけ随従する有様だがしかし、まさか。

居なくなつた信君のぶきみの内室は信玄の娘、つまりは勝頼の異母妹である。信君自身も母が信玄の姉であり、歴とした一門衆、遂に勝頼は家中からさえ離反者を出したのである。

「……おそれながら、殿」小山田弥三郎信茂おやまだやさむつのおぶしげが進み出る。「つい先程、織田方より斯様な密書が届きましてございます」

諸将の一樣に複雑そうな表情を見渡せば、読まずしてその内容の予想はついたが、勝頼は敢えて受け取って一同の前で広げて見せた。差し出して来たのが信茂だけと云うのが、今の自分の境遇をよく表していると思う。

中身は想像通りだった。信忠の名で寄越されたそれには今の武田家の窮状とそれがこれまでの悪行に由る因果応報である由、今織田

方に降ったものはその所領安堵を約束し、又、勝頼親子の首級くびさえ得れば名門武田家そのものは絶やすつもりのない由。御丁寧に信君の添え状まで付いている。

「成程、私の首級くびを上げれば武田の主に収まると云う肚か」

実に解り易い行動に、思わず勝頼は吹き出した。事ここに至つては、己の欲に忠実な信君が却つて好ましくもあつた。少なくとも今、狼狽えた風に自分を取り囲む連中よりは余程にマシだ。

勝頼の首級が上がる時、果たしてこの中の何人がその場に居合わせるのだろうか。

（何もかも手遅れよ）

今更慌てる必要などない。勝頼は自分に云い聞かせた。長篠の戦に負けた時に、もう己の未来は決まっていたのだ。今や武田家に残っているのは何の役にも立たない過去の栄光と気位だけ、たといこの戦を切り抜けても、畢竟滅ぶ事に変わりはない。

明智は未だに動いてくれない。あの書状は嘘だったのだ。織田家が内から崩れる期待は出来ない。

「それで、玄蕃に従つたのは」

「河内衆の殆どが」
かわち

もはや笑いしか浮かばない。

「殿……」

諸将はまるで迷子の童の様に立ち尽くしている。一様に身を縮め、固くなっているのは信州の寒風の所為だけではない。

暫時、一同は沈黙した。葉の落ちた枝の擦れ合う乾いた音だけが、彼らの耳を虚しく通り過ぎた。

やがて、

「……新府しんぷに退く」

そう命じた勝頼の声は、我ながら驚く程に、生気がなかった。

破 七

「金を貸して下され」

ほそかわただおき
細川忠興は両手を差し出した。

「御免つかまつる」

あけちみつひで
明智光秀は速やかに戸を閉めようとした。

しかし忠興はするりと足を戸に挟ませると、右手を光秀の手に添えて、力尽くで門前払いを阻止しにかかった。

「この忙しい折に何をしておいでか」忠興の、はみ出た足を踏みつけながら、光秀は叱る。「早う帰られて出馬の用意を調えられよ」

忠興も負けてはいない。「ですから、その準備の為に、義父上に借金をば」

「金がなければ骨董品を売れば良いではないか」

場所は近江の坂本城、信長に随いての出陣までは後僅か、光秀も忠興もその後詰に従う身である。当然既に準備万端でなければならぬ筈だが、まさかこの期に及んで金策に苦勞しているとは。

「だから常日頃から金は貯めておけと申しておいたではないか。藝げいを極めるは結構だがそれで武士の本分を忘る様では本末転倒でござる……と、与一郎よいちろう（細川藤孝）に伝えられよ」

「ア、否、戦の支度は既にし終えてございます」

士の務めを忘れる筈がありませぬと、義理の息子は胸を張る。

「では、何故」

「だって甲斐に行くのですよ？」そうして嬉々と瞳を輝かせた。「かんとうしつじ関東執事縁の物とか、鎌倉御所のアレコレとか、秘蔵の宝物が眠っているに決まっておりますではありませんか！」

……頭痛が痛い、などと云うやくたいもない単語が、光秀の脳裏に浮かんた。

「のう、嬪殿」

親友の子育て能力につくづくの疑問を抱きつつ、「私等が何をし

に甲斐に向かうか、解つておいでであらうか」

「武田をぶつ潰しに参ります」

「うん……左様であるな」

「デ、甲信の城主を根切りにします。何と行つても名門武田家でございませうれば躑躅ヶ崎館に宝物の十や二十は当然有りますでしょう。ホラ、木曾義昌は旭將軍（木曾義仲）の裔でございますし、何処でしたか那須家の末裔も居ると云う話でございますし」

期待に胸を膨らませ、忠興は未だ見ぬ甲斐の宝物について熱く語る。成程云われてみれば彼の地はかつての鎌倉の政所のすぐ近く、源家縁の地であるから、忠興が興奮するのも無理からぬ話であつた。光秀もその気持ちはとても良く解る。

が。

「のう、婿殿」

光秀はニツコリ微笑んだ。「珠は、元気にしておるか？」

「勿論でござる！」いっその喜色を浮かべ、力強く忠興は頷く。

「そうだ、たまへの土産も、たと持つて帰らねばなりません！」

義理の親子はお互い笑みを浮かべ、

唐突に光秀は戸を閉め切つた。

「ちよ、義父上！」

戸を叩く娘婿には頓着せず、しつかと門をかけ、「良いか、丹後殿が何を云つても決して戸を開けぬ様に」

他家の数寄もの狂いに付き合つてやる義理は、光秀にはない。己とて出陣の調えに忙しいし、また、それに加えて厄介な問題を抱えてもいるのだから。

「今のが細川の御令息であらせられるか」

その厄介事、不意に背後から掛けられた声に、光秀はうんざりした思いで振り返つた。

「途中で座を離れて申し訳ない」

それから、興味深そうに戸口を見遣る男の視線を遮つて、「ササ、どうぞ部屋に戻りましょうや」

光秀に促され、猶も名残惜しそうに向こうを振り返りながら男は苦笑する。「多忙の中、御手を煩わせ候の事、まことにかたじけなくございます」

全くその通りと思いながらも、光秀は黙って男と向かい合う。どうせ口だけの謝意である。

対峙する男は、精々が下士と云った風体、一国の主である身には、本来ならば齒牙にもかけぬ相手なのだが。

「とは云え、ここで逢ったも何がしかの縁、折角であるから細川の殿とも誼を通じておきたいものでありますな」

歳は二〇の後半か、身長は光秀よりも高く、声は低いが肌の色の異様に白い。一見すると女と見紛うばかりの美貌であった。

正月に長曾我部の遣いと名乗って現れたこの男は、ちようそかへ もとちか長曾我部元親と、そして明智光國なる人物からの書状を光秀に渡し、光秀の眼前で織田家の西方政策を堂々と批判した。

『我が殿に四国所領の朱印状を下されながら、よく目先の慾に捕われて、みよし三好を鼻屑になさるとは如何なものか。みかつきはちやつほ三日月葉茶壺にでも惑わされたか。やすながめ康長奴が跋扈するを煽つてなさは既に承知ぞ』

いよのふたなしま長宗我部は伊予二名洲（四国）、土佐国の大名で、当主はやむらゐつ弥三郎元親、対長宗我部の交渉事は光秀が行っていたから、使者が光秀の元に遣わされるのは道理ではあった。

しかしながら、身分のない、印判も花押もない書状を内々に貰ういわれはない。

始め、光秀はそう云って彼を追いつ出したのだが。

「……今、そなたが居る事を他に知られるは互いの為にならぬと思うが」

「で、ありましような」

頓着なげに云って、男は片眉を上げる。そうして光秀に笑い掛けた。

「では、謀反の企みでも致しましょうか」

破 八

……武田家は自壊する。

信長が出て来るまでもなく、武田家は潰走していく。

木曾義昌が寝返ったのが二月一日、織田家家中に動員が掛けられたのが三日。先鋒の出陣が六日で、総大将の信忠が城を出たのが一二日、それから僅か二週間の内に、信濃の殆どを制圧され、しかもそれらの城を守る為の抵抗さえも大して行われず、名だたる重臣達が雪崩を打って去武田を去る。

「もはや我等の運命は風前の灯」

三月一日、信忠率いる三万の軍勢が続々と高遠城を取り囲み、向かい合う附城つけじろの築かれる音は、城に籠る彼等に上げる読経の様でもあった。

「名より実を取り、御家を残すもまた武士の務め」

対する高遠の兵は僅かに三千。

「織田に降る者は止めはせぬ。なんじら爾等如何とするや」

信濃国高遠城城主、仁科五郎盛信たかとお にしなごは部下達を見渡した。

月のない初春の夜は寒々と冥く、かすかに揺らめく灯火は、死の間近に控えた者達を陰影深く照らしている。

飯田城から合流した、保科ほしな甚四郎正直じんしろうが、鼠の如く視線を彷徨わせている。

「……殿は偉大なりし信玄公が御令息、信玄公の血は新羅三郎しんらさん以来の歴とした源家筋」

しばしの沈黙の後、口を開いたのは小山田六左衛門昌成おやまだろくざえもんだった。

「由緒正しき武田の一門たる吾等が、何ぞ似非平家如きエセに下りましようか。一同命在る限り戦い抜く所存」

何人かが無言で頷く動作を見せる。何人かは顔を歪め、ふいと盛信から視線を逸らす。

「勝ち目があると思うのか」

「戦を前にして戦わずに逃げるなら、何の為の武士でございましょう」

「高遠を棄て、新府に合流する策もある」

「皆そう云って逃げました。そうして今やこの有様です」

正直がびくりと肩を震わせる。

「ここは信濃の最後の砦、信濃を失えばいよいよ甲斐、駿河の守りも厳しくなりましょう。逆にここで信忠を塞げれば、織田勢は一気に勢いを殺がれる事となります。

万の軍勢と云えば如何にも恐ろし気でございますが、数の多きはそれだけ烏合の衆であると云う事、一度窮地に陥ればたちどころに瓦解致しますよう。信忠など所詮は坊々ぼんぼん、親の七光りがなければ何も出来ませぬ」

「……私も、岐阜中将と同年だが」

盛信の口端が歪む。しかも同じく信玄の七光りの身。

「何の！ 殿と信忠では器がまるで違いますぞ！」

力強く断言した昌成に苦笑して、盛信は更に意見を促す。聞こえて来るのは何れもここで果てんとする声ばかり、視界の隅では正直が所在なげに左右を見廻して、そうして意気消沈して俯いた。

しばく項垂れうなだ、逡巡し、己の行く末を決めかねていた者達も、やがて廻りの声に押される様に顔を上げ、一心に主を見返す。

盛信は頷いて応えた。「お主達の心意気、しかと受け取った」

席を立ち、昌成を従えて表の間へと下がる。そこに控えているのは一人の僧侶、携えているのは書状と黄金。

信忠が、降伏を勧めに寄越した者だった。

僧は平伏して盛信達を迎える。彼もまたこの近場の人間だった。

彼の瞳の内に武田家に対する侮蔑の色が隠れているのを、盛信は見逃さなかった。

綺星の如く銀の光が煌めいて、僧侶が耳を押さえて仰け反った。その襟首を引っ掴んで鼻を殺ぎ落とし、金の入った袋を叩き付けて叫ぶ。

「帰って岐阜中将殿に伝えられよ。高遠は武田の城、信濃は武田の領国、下賤な成り上がり者などに呉れてやる謂れは無い。徒に諍いを起こす尾張のうつけ共など不動明王が蹴散らしてくれるわ!」

多分これが、武田家の最期の抵抗となるのだろう。

破 九

「この書状は見えておるな」

かわじりひでたか河尻秀隆がそう云うので、目を閉じて見えないと返してやった。

「じゃが儂の声は聞こえておるな」

更に云われたので耳を塞ぐ。

その両手をぐいと引き剥がし、口角から唾を飛ばしながら秀隆は怒鳴った。

「上様からの仰せまで無視しおつて、どれだけ規律を乱せば気が済むのか！ 良か、上様にもう一度書状を送ったからな、切腹を申し付けられても儂は知らんぞ！」

その言葉に舌打ちして、もりながよし森長可は唾まみれになった顔を手で拭った。その隣では唾の雨を免れただんだたまさ団忠正が大仰に身を竦め、しかし目は笑いながら長可と秀隆を眺めている。顛谷こめがみに青筋を立てて肩を震わせる秀隆は、そんな忠正にも怒りの視線を向けた。

「うぬも、かんくろつ管九郎君の与力であるならば此奴を止めこそすれ、一緒になって軍令に背くとは何事か！ これを読んでみよ！」

「はあ」

叱られた方は惚ほうけた様に頬を掻き、「城介事、是如言上、信長出馬之間八……」

「違う、次の条！」

「エエト……かじわらへいはちろう梶原平八郎、各々おのおの談合二不及、エー、先々みやだわきへ陣取之由候、アー、わかき者共……いやア照れますなあそろそろ之間……」

「真面目に読め！ 読んで感想を云うてみよ！」

「そうですね……上様には私が、梶原から団へ名字を改めた事、そろそろ覚えて戴きとう存じます。つきましては益々発奮して……」

「好い加減にしとけよこの糞餓鬼共！」

「……なにゆえこんな処で詞戦が始まっとるんだ」

ひどく呆れたふうな声が、闇夜の向こうから足音と共に現れた。

「殿！ 軍監を罷免して下され！ 鼯負します。自分の息子が抜け駆けしたのを棚に上げて俺等の事だけ上に密告します！ 鼯負やげ、鼯負、鼯負、ヒ・イ・キ！」

「オノレにだきやあ云われとうないわ！」

「あー……一体何の話をしておるのだ？」

長可と秀隆を見比べ、それから忠正を向いた信忠に、忠正はソ、と件の書状を差し出した。

「大体が、殿も殿です！」

「ハア」思いがけず向いた矛先に、書状に目を通しながら信忠は気のない吐息を返す。

「よろしいですか、近所の悪童共のちゃんちゃんばらとは訳が違うのですぞ。殿の粗忽な行いが、織田家の負けを引き起こすかも知れぬのです。今一度頭を冷やされて、拙攻に逸るをいましめられよ」

「……その昔、倍以上の兵差があつた東海道一の弓取りに喧嘩を売つた、尾張のウツケの三郎君と愉快な郎党衆と云うのがおつてだな……」

「勝つたから良いのです、勝つたから！」

愉快な郎党衆、河尻秀隆は断言した。

「俺等も勝ちやあ良えやんけ」とは長可の言。

「やかましいわ。お前なんぞ真つ先に討たれてまえ」

「シテ、殿、如何用にございまするか」

何時の間にやら座を離れて信忠の脇に侍っていた忠正が、我関せずとばかりに話題を切る。

「オオそうだ、高遠に遣つた僧が帰つて来たでな、お主等呼びに」

「なにゆえ御自ら足を運ばれるか！ 左様な用は小姓にでも任せておけばよろしかろう！」

その信忠附の小姓、高橋藤丸は、忠正の後ろで何やらモゴモゴと口を動かしている。

「私の大事な小姓をうぬ等の喧嘩で殺される訳にはいかぬからの。」

で、其許等そこもとはアレか、主人をこの寒空に突っ立たせたままそこで諍しやうい続けるつもりか」

そこで漸く、秀隆は正気に返ったらしかった。慌てて背筋を伸ばして姿勢を正すとその勢いのまま長可の臍へしを蹴り、次いで平伏する。

「仁科からの返答は、如何に」

「それを今から話すから来いと云うとるんだ」

「殿、河尻と毛利の飯田城の件……」

「長可チョウカ、そんなに過ぎた事ばかり喋りたいんなら高遠は留守番するか」

不承不承、長可も立ち上がる。

それを満足気に見遣って頷くと、信忠は踵を返す。

「……肥前ひぜん（川尻秀隆）、お主ももう少し落ち着け。息子と同世代の部下にまで怒鳴りからかしたとったら身が持たんぞ」

長可を先に歩かせて、信忠は傍らに耳打ちした。長可は信忠の側近とも云え、そして隣を歩く秀隆は信長の黒母衣衆筆頭くろぼろとして、どちらも信忠の初陣から、彼の為に働いて　そうしてその初陣の時から、先程の様な悶着を起こし続けていたのだった。

「好い加減諦めろ。勝蔵はああ云う性格だ。そこが彼奴の良い処だろう？」

「何がですか何処がですか。……おお三左衛門さんざえもん（森可成）殿は真実の武士であらせられたのに。何の因果で息子がアレなのか……」

「良い奴ではないか。武勇も有るし、頭も廻る。儂は好きだぞ、素直で解りやすいし」

「殿も大殿も、武蔵守むさしのかみを買い被り過ぎです」

忌々し気に秀隆は吐き捨てる。「私に云わせれば、彼奴は殿の御威光を笠に着て、それを己が才覚だと錯覚しておるだけの童に過ぎませぬ。ヤレ勇猛だ鬼の働きだと申しても、彼奴が出馬したのは総て元から勝ちの決まった戦、本人の才覚ではありませぬ」

「それはそうだろうな」

あっさり首肯した信忠に、却って秀隆の方が呆氣に取られたらし

かった。何とはなしに見つめていた地面から視線を移して彼の口を半開きにした表情を見、自嘲を込めて、信忠は嗤った。

「だがそれで勝蔵を責めるのは酷な話だ。それを云うなら彼奴だけでなく私もだろうし、平八郎や久蔵もそうだ。お主の息子もそうであらうな」

一拍置いて、秀隆は慌てた風に首を振る。

「けして、左様な意味で申した訳では」

「左様な意味だよ」

否定する声の方には目を向けず、再び視線を落として信忠は云う。
「肥前の云う通り、勝てる戦しか出た事はないのだ。私も勝蔵もな勝って当然、負ければ仕舞い。突出するより他に能がないのは仕様があるまい」

視界の端に、秀隆が反論したそうにするのが見える。木陰には根雪の残る、しかし水気の無い地面を踏み締めながら、信忠は敢えて顔を上げない。

秀隆には理解出来ないだろうと、信忠は思う。信忠の祖父、のぶひで信秀の代から弾正忠家の為に尽くして来てくれた彼は、様々な逆境をよく知っているであろうから。信秀も信長も、よく戦に負けた。事有る毎に苦境に立った。そしてその度に奮起し、知恵と勇気を振り絞り、ここ迄上り詰めたのだ。

（儂等と上達とは見られるものが違うのだ……）

「勝頼が負けぬのは容易だ。この度儂が率いる幾万の兵、これだけ大きくなれば中身は烏合の衆と大差はない。背後に廻って兵糧を分断されればすぐさま瓦解、目も当てられぬ潰走か、縦んば持ち堪えても後は気長に儂等を小分けして潰してゆけば、マア何時かは勝てるだろうよ」

だが勝頼はそうしないであろう。傍らの秀隆が云う様に、それは武士の作法ではない。信玄の子が採る兵法ではない。

秀隆は云う。

「勝頼の戦上手は本人も知る処ゆえ、畏れ多くも殿を侮って、正面

から来るに間違いありません。ここは大殿の後詰めを待ち、しかる後に……」

「上は待たぬ。払暁と共に高遠を攻め、その勢いで甲斐を落とす」
「殿！」

「これだけの大勢、ただ止め置くだけでどれ程の用意が要ると思つておる。家にはそんな金はないからな。近隣の村からことごとく略奪するつもりか？ 第一、一つ処に固まった万単位の兵などでかいたのではないか、私が勝頼ならば間違いなく奇襲を掛けるぞ。そうなれば最期、兵を動かすにしても上様の時代とは規模が違うのだ、金ヶ崎のアレは二度は出来ぬ事ぞ」

負ければ仕舞い。負け戦から逃げ帰る術も、そこから再起する心得も、信忠達には存在しない。無様に退けと云うのなら誰もが死を選ぶだろう。そう云う戦しか、彼等はこれまで戦つて来なかった。

（前に進むより他にはなし）

退くものなどには誰も従わない。それでこそ、天下人たる家の者達なのである。

「勝頼が潔く正面から来ようと云うのに私が搦め手を使う訳にはいかぬ。後世の嗤い者になる気など毛頭ない。この勢いに乗って速やかに武田を殲滅してこそ、織田家の嫡男の器量であらう。違つか？」
辿り着いた本陣には既に諸将が坐して信忠達を迎えている。

「皆のもの、待たせた」

その血の滾る、若さに満ちた顔を見渡し信忠は頷く。
星々の煌めく乾いた夜空に、佐々清蔵さつせいぞうの聲が響いた。

「では、これより評定を始めます」

破 十

「仁科からの返答は『否』であつた」

長可を始めとした、信忠軍の主力を担う侍大将達が、一言も聞き逃すまいと一心に信忠の唇を見つめている。

「使番は耳と鼻を削ぎ落とされて帰つて来おつた。曰く我等不義の臆病者に非ず、早々に攻めて来らるるが宜しかろうとの仰せだそうだ」

使者を送つた信忠自身、仁科盛信が降伏の呼びかけに応じるとは最初から思つていない。名門武田家の人間として、或いは信玄の息子として、彼はその最期まで織田家に抗うだろう。

「河尻肥前守、毛利河内守、森勝蔵、団平八郎はこれより小笠原掃部に従つて藤沢の川を下り、大手口へ向かえ。私以下本隊はここ貝沼原に着陣、尾根を伝つて搦手へ廻る。他三方向については構うな土地勘のない山に態々分け入つても利はないからの」

見渡した表情に不安の色はない。たとい地の利がなくともこの物量差、決して負ける筈がないと、誰しもが確信している。

（果たしてこの中で『敗け』を知る者がどれだけ在るのだろう……）
白い息を吐きながら、不意に信忠は考えた。若衆の中ではつきりと『敗北』した経験を持つ者は、ひよつとしたら信房位しか居ないのではないか。

（武田家もそうであつたのだろうな）

他国の正確な内情など信忠の知る由もないが、何となく信忠はそう思った。信玄はいざ知らず、少なくともその取り巻き連中は、『敗ける事』を忘れ果てた者達だつたのではないか。

勿論、無敗でいられるならその方が良い。敗北は大抵悲惨なものであるし、御家や所領が潰れてしまつては元も子もない。斎藤や松永、明智の例を見るまでもなく、世に名を馳せるものは往々にして照勝者の元を転々として行くものだ。

だが、より良い待遇を求め主家を見限るのは少し違つと、信忠は考えている。木曾や小笠原等からは、上を目指す気概など見て取る事は出来ない。地を這い泥を舐め、家を危機に晒してまで頂を目指すつもりは、彼等にはないだろう。

翻つて己の部下を見てもそれは同じ。今自分が横死したとして、天下取りに名乗りを上げられる器量の持ち主は、居ない。

「攻撃は明朝。暁角と共に城を挟撃する」

乱世は終わった。もはや群雄が割拠し鎬を削り、手柄を求め、下剋上を試みる時代ではなくなった。

「此度の出陣では初めてのまともな戦いとなるだろう」

奇襲ではなく根廻しが、個人の槍よりも集団の鉄炮が、これらは戦を彩るだろう。圧倒的戦力差を以て敵を恫喝し叩き潰し、怨嗟も詛言も併吞して拡大した先に待っているのは官僚の世界、武士の要らぬ世の中だ。武功はもう必要ない。

「数で勝るとは云え相手は世に名立たる赤揃え。ゆめ油断など召されるな」

如何に勝ち馬に乗り続けるか、如何に失敗を周囲に悟らせぬか。統一されつつある天下には、もはや敗けて逃げる場所など存在しない。

一度の失態は、そのまま自分と御家の仕舞いを意味する。

「上様からの『留まれ』の御言葉を気にするものも居るかも知れぬが、それについては私が全ての責任を取る」

これが最後の戦だ。梟雄が夢見た婆娑羅の最後、そうしてここから、太平の世への最初の戦。

牙旗を手に取り高く掲げる。朔日の空に、松明によってほのかに赤く照らされた象牙があたかも月の代わりの如く輝いた。

「織田家一世一代の大いさ、ここに集められたは当家の精鋭であると心得られよ。源平交代はいよいよ大詰め、天下布武まで後僅か。各陣一番槍を上げる心意気で御家の名を世に知らしめられよ」

そして叫ぶ。

「各々方、存分に舞い候へ！」

破 十一

かつての飯田城主、保科正直ほしなまさなおは夜中に高遠城中に火を放つ旨を申し出て来たが、何事も起こらぬまま夜は明けた。

三月二日、日の出と共に信忠達は本陣を引き払い、三峰川と赤石山脈の尾根に挟まれる形で高遠の城を目指す。

直線距離で一里半と云った処か、その間に先に戦鬪を始めたのは大手口側の河尻達、例によって抜け駆けを試みた森、団の両隊が月蔵山を突つ切つて法幢院曲輪ほうそういんくるわから攻め入ろうとし、原隼人佑はらはやとのすけ、春日河内守昌義かわたのかみまさよし、渡辺金太夫照わたなべきんだゆうてると衝突した。

大手口はくぐつてすぐの処が二の丸の堀であり、本丸までの距離は搦手よりも近い。しかしながら門の周囲には他より幅広の空堀が巡らせてあり、入り口は単騎が精一杯の門より他になし、攻め入るのは容易ではなかった。

ところが法幢院曲輪は三峰川に突き出している関係から他よりも堀の幅が狭く、更にここを落とせば南曲輪から容易に本丸へ攻め入る事が出来る。

そんな訳で手っ取り早く手柄を狙った長可と忠正であつたが、当然の事ながら相手もその手は警戒している。

原隼人佑は武田家重臣である原美濃守虎胤はらみののかみとらたねの係累、彼自身もまた槍の名手。

渡辺照は元々今川家家臣で後に徳川家の傘下に入つたが高天神城陥落と共に武田家に降つた。姉川合戦では一番槍の武功を上げ、信長から感状を与えられた程の強者である。

城を枕に果てる覚悟を決めた士達は、既に土塁の上で弓と石とを構えて待ち構えている。

堀に張り付き上ろうとする者、それを弓で射、礮で止め、あるいは槍で投げ払い、糞尿を播き散らして防ごうとする者。

たちまちの内に双方入り乱れての乱戦となつた。

「この金玉野郎がッ。とつとと首斬らせんかい！」

先陣切つて敵中に駆け入っていた長可の声が、生暖かい早朝の大手口に響き渡る。

とは云え踏んだ場数は相手の方が上、更には小山田昌成おやまだまさなり、大学助までもが加わつて、織田勢は一向に前に進めない。

「あの阿呆ン達等ダラア、何を考えなしに突つ走つとんのじゃあ！」
秀隆の叫びも、事ここに至つては手遅れである。

「大手門の側へ廻りましょう。武蔵守は捨て置いて、手薄の正面から攻め入るべきです」

小笠原信嶺の意を容れて、毛利長秀を東へと廻す。

そうしてそれらの喧噪と時を同じくして、搦手口の信忠隊も攻撃を開始した。

搦手側は小山を通る為に道は狭く、曲がり角が多い。河渡して最初の門を抜けると急な上り坂に松林、既に敵は茂みに潜んで、雨の如く矢を降らせて来る。

一番槍を求めて駆け出そうとしていた者達の足がことごとく止まった。

皆一様に戸惑いの表情を浮かべ、それから恐怖のそれへとすり替わつてゆく。

元々、尾張は弱兵で有名だった。美濃兵はまだマシとは云つても信濃甲斐の赤揃えとは比べるべくもない。一度勢いを削がれば懸太鼓の音も空しく、恐怖に吞まれて足が竦み、竦んだその位置で矢を射かけられる。

半刻持ち堪えたのは寧ろ讃えるべきであろう。やがて門に近いものから、徐々に徐々に、信忠に向かって後退を始める。既に顔は恐怖の相が限界まで貼り付き、あるものは齒を鳴らし又あるものは腰を抜かして四つん這いになって逃げ始める。

信忠は舌打ちした。このままでは友崩れが始まる。

「清蔵！ 辰千代！」

振り返るや否や清蔵の手から鎧を引つた。馬！

清蔵が慌てて馬の口を取りに行く間ももどかしく、信忠は自ら駆け寄ると鞍も置かずに飛び乗って蹴りを入れる。一声、馬は鋭く鳴くと、郎党を轢き殺す勢いで駆け出した。

そのまま馬上から武田方の郎党を何名か薙ぎ払い、馬を飛び降り仰天して口を開けている足軽から槌を奪い取ると、信忠は勢い良くそれを振り下ろす。

「者共ここが正念場ぞッ」

外枳虎口を越え、搦手門に至るや櫓から石火矢が注がれる。

「臆するな。背を向ければ狙い討たれるぞ」

信忠は叱咤する。ここまで来れば流石に覚悟が決まったか、屈強のものが何人か彼の後に続いて門へと取り付く。それを見て慌てて駆け出す者、端の方から弓を射る者、転がっていた礫を取り上げて放る者。やがて遂に信忠達は、閉じられた門構えを引き倒す事に成功した。

「サア門は開いたぞ。皆のもの一旦に乗り入るべき！」

石垣をよじ上り、塀の上に立って信忠は絶叫する。見渡した向こう側、松林と堀を挟んで、遠く幽かに本郭が見えた。

既に夜は明け切り、春特有の霞んだ水色と、掃いた様な薄い雲が空には広がっている。城内の所々には萌黄と桜色、風が吹く度に桜色が千々に舞う。

束の間、信忠は景色に心を奪われた。

息を吸って吐くまでの間、しかしその一瞬は、弓をよつぴいて射切るには充分な間であった。右肩に衝撃があったと思った瞬間、信忠は門の内側に転げ落ちた。

武田の兵達が、我先を争って彼の元に駆け出して行く。

すぐさま起き上がり、咄嗟に槌を突き出して最初の一人は退けた。右手側から槍が来る。それをしゃがんで躲した。槌を捨て抜刀し、相手の得物を叩き落とす。

左側からも槍が迫った。一人目を打ち払い、二人目の柄の下を駆け抜けた処で、視界の端から叫び声を上げて槍が振り下ろされる。

「殿！」

死を覚悟したその時突然、攻手が断末魔と共に横に飛んだ。頬をかすめた切先が、浅く一文字を刻んで地面に落ちる。

信忠の命の恩人はその勢いで三人程薙ぎ倒すと、呆ける信忠の右腕を引つ張つて門の外側へと走り出した。肩の痛みが思わず口をついて出て来たが何とかなえ、信忠も走る。

背中越しに一番頸の名乗りが聞こえた。視線を向ければ、加藤辰千代かつちよが高々と槍先に鉢金を掲げているのが見えた。

取つて返した先では一益が死人の様な土気色の顔で出迎えてくれている。

信忠は改めて恩人の顔を見た。歳は信忠よりも下、二十歳かそこらと云つた処か、鶴丸の母衣ほろを背負い、何人か若党が随いて来ているが、徒足はだしな上に指物さしものもないので何処の家のものかまでは判らない。精悍な顔立ちで、門の向こうを厳しい表情で睨み据えてはいるが、半開きになつた唇から齒の鳴る音が漏れていた。

「礼を云う。そち、名は」

「阿閉淡路守が家臣、渡辺勘兵衛了と申します」
あつじあわじのかみ わたなべかんべえさしる

勘兵衛、と口の中で呟いて、すぐに信忠は思い至つた。

「ああ、アレか。荒木の時の、干し鮭の」

阿閉家母衣衆　つまりは家中の最精鋭、有岡城合戦の折には一七の若輩にして一番頸の功を上げた。信長に召され、干し鮭を賜つた武功は、同じ合戦に身を投じたものとして良く覚えていた。

赤面して肯定するをよそに、信忠は深く頷く。

「此度もまた稀に見る働きであつた。何と云つても私の命を救つたのだからな」

それから彼は、この男が腰に差しているのが如何にもな数打であるのに目を留めた。どうせ槍でしか打ち合わぬから、と云う事なのだろうが、母衣衆ともあろうものが安物を持ち歩くのは戴けない。

「勘兵衛、其許にはこれを与える」

腰の脇差を差し出して、了に笑いかける。

了は暫時ぽかんと口を開け、次に興奮でみるみる頬を紅潮させた。
「戦には派手な拵えだが中は美濃の名刀だ。差し当りこれを褒美とする」

感激の余りか無言で首を振る了が可笑しくて、信忠は益々笑った。
「残念だが私は戦場に鮭を持ち歩く趣味はないからの。後でそれを持つて私の元へ来い。改めて褒美を使わす」

それだけ云い置いて、流れる血もそのままに、信忠は駆け出した。
「サア最初に手柄を上げたるは辰千代と勘兵衛の若衆であるぞ。どうした強者共、今こそ究竟の働きを見せて世に名を轟かせよや!」

破 十二

門前での戦闘は明六ツから朝五ツ半まで、寡は衆に敵せずと云う
恵王の言葉通り、終に渡辺照等わたなへてるの大將格が討たれ始め、武田勢は繰くり
引びきを始めた。

「よっしゃあ！ 追討ちじゃあ！」

と、大手口の長可などは気炎を上げたが、これは秀隆に因って断
固として阻止された。いまだ小山田兄弟等は生き延びており、本丸
には仁科盛信率にしなもりのぶいる主力が待っているからだった。

信忠率のぶいえいる搦手口の損害は大手口よりも酷く、織田家側でも織田
信家等の首級くびが取られている。加えて二の丸、本丸の門へは侍町と
三の丸を突つ切らねばならぬため、あえて深追いはせず、陣を備え
直す方に信忠は重きを置いた。

とりあえず侍町に火を放ち様子を見るが、三の丸も二の丸も不気
味なまでの静けさ、人の気配は確かにある事から、恐らくは織田勢
が二の丸に掛かった処で、背後の三の丸と挟み撃ちにする算段であ
ろう。

「でしたらば堀から城壁をよじ登って行けば楽に本丸へ辿り着ける
のでは」

森家にしか出来ない献策は聞かなかった事として、二の丸を見上
げながら円郭の攻めにくい事に改めて毒づく信忠だった。

ついでに、彼の傷を見た秀隆がどの太鼓よりも五月蠅く喚き散ら
していたが、こちらは端から聞く気はない。

「オイ、盛信」

前に出て、試しに本丸に向かって叫んでみた。

「早う来いと抜かすから来てやったに、何を引き籠かわやっておる？ 廁かわや
から出られん様になったか？ 念仏でも唱えておるか？ 辞世を詠みた
いならば私の右筆ゆうひつを貸してやるぞ」

あちらからの反応はない。

「悪口も返せぬ程怯えておるのか。地獄の御父君が見たらさぞや御嘆きであろうなア」

風に乗って散って行く桜の花弁だけが、信忠の言葉を賑やかしてくれている。

「……反応のない悪口ってつまらんな」

信忠がそう云って戻ろうとした途端、湯気を立てた糞尿が天から弧を描いて降って来た。

絶叫しながら逃げ惑った織田家の何人かが猛烈な勢いで武田勢への罵倒を始めると、「イヤナニ」と、二の丸の石落あたりから切れ切れの声が返る。

「口から糞を垂れてらっしゃったものでね、うっかり捨て場と間違えてしまいましたわい」

矢を何本か射掛けさせたが、勿論届く筈もない。

そのまま詞戦が始まるうとした時、

「某は尾張国織田弾正忠家、三郎信長が五男、織田源三郎信房、ふそれかし
るくは武田坊丸勝長と申す者。高遠城主、仁科五郎君に申し開きた
く候、今暫し御耳を傾けて戴きたく存ずる！」

騎馬武者が単騎進み出て、大音声で名乗りを上げた。

慌てて信忠は本陣を振り返る。身代わりとして床机に坐らせておいた筈の弟の姿はなかった。

舌打ちし、口上を述べる馬上へ視線を戻す。

団忠正が信忠の傍らに進み出て問うた。

「いかが致しまする」

「放っておけ」

信忠は言い捨てる。

「既に雌雄は決し、高遠の落ちる事最早如何ともし難く、今端緒を開きたるは徒に卒利を殺さしむるのみ。四郎（武田勝頼）君は吾が養父、貴君も又叔父とも云え、その恩顧忘れるべからず、高遠を開きたればこの身に代えても子孫郎党の事御世話致したく候。なにとぞ吾が元に降り候へ」

「お主等、彼奴の言葉をちゃんと聞いておけよー」

信忠の呟きに、それに合わせて風が強く吹く。

春の風の前に花と塵の舞い狂う中、双方の視線を一身に受けながら、信房は更に声を大きくする。

「一時の武功に逸り、甲斐武田の名跡を絶やす事こそ父祖への不忠と云うべし。堪え難きを耐え、運命この時に至るとも、ただただ御家の為を思い身を永らえるこそ武士の本分なり。」

岐阜中將と御令妹が御成婚あらば義兄弟の間柄、一度は家族とならんものを今互いに争いたるは誠に悲しき事に候。此度の戦のその尋常ならざる御働きの事、織田家に降れども世に賞賛されるべきに候、奇兵を起こし、逆臣となりし者共に武田の名を継がすこそ不徳の極み、無念の胸中、身も裂かんばかりとは存ずるが、何ぞ御家の為に膝を屈して下され！」

本丸の欄干に人影が現れた。

長弓を左手に掴んだ男、その見事な具足の一揃え。

殊に目立つのは頭形兜に四割菱の前立。

仁科盛信本人である。

「……貴殿は既に織田に帰参されし身なれば、二度と相容れぬ間柄。今に至りて情けを掛けるは、我が一門への侮辱と心得られよ」

「……殿、下知を」

坂井越中守が寄つて来る。鉄炮衆を侍らせて。

軽く右手を挙げて信忠はそれを制す。「よせ。河尻等の目が在る」

「戦中の不幸な事故です」

「今は彼奴等のやり取りを胸に刻んでおくだけで良い」

高く昇った太陽は盛信の鎧兜を金欄きんらんの如く照らし、その姿はまるで黄金を纏った様、朗々と語る声は威厳に満ちて、なるほど名門の師弟は斯くあるやの風情に満ちている。

だが悲しき哉。

「高遠の負けは既に決まっておる」

信房が武田に拘泥するは好都合、

「下手に逸つて上様等に訝られるのも事だ。源^{アレ}三郎を失墜させるにはもつと手を尽くさねば、な」

破 十三

各務元正は森家の乙名である。かがみもとまさ おとな

ちなみに齡は四二、元々は美濃国の出身で斎藤道三に仕えていたが、二〇歳の折りに揉め事を起こして出奔した。伝手を辿って森家に行き着き、以来、可政、長可の二代に渡って仕官している。

その彼は今、高遠城の三の丸の塀に貼り付いて、武田の様子を窺っていた。

乙名すなはち宿老の仕事と云えば、主の補佐である。ある時は財務に、ある時は調略に、陰に日向に棟梁を支え、家臣団をまとめるのが勤めであつた。足軽よろしく最前線に立つのは当然、業務内容にはない。

だが、元正は戦が好きだつた。一番槍が大好きであつた。大音声で名乗りを上げるのが好きだつた。一人敵陣に突出し、高々と槍を掲げる時は恍惚となる。廻りの羨望の視線を浴びると心が躍る。一番頭くびなど最高だ。

そんな訳で元正は、一人旗指物はたさしものを背負い、ヤモリの様に壁に貼り付いていた。

そうして、四十路の壁というものをひしひしと味わつて居た。

(まつたく、年は取りたくないものよ)

三年前なら難なく登り切れたであろうこの壁も、今では足が上がらない。そうこうする内に壁の中程で立ち往生して、腰が痛くて堪らなかつた。

(さて、いかにこの状況から脱するべきか……)

進むも引くもままならぬ状況、ならばと横に進んでみる 余り意味はない気もするが。

一間分程進んだところで人のざわめきが耳に入った。息を殺し、僅かな隙間を捜し当てて内を見ると、今正に陪審達が評議しているところであつた。

より良く見聞きしようと努力の末に、遂に彼は矢狭間に頭を突っ込む事に成功した。向こうでは正に繰り出さんと云う男が二、三〇ばかり、元正の耳にも彼等の評定が、はっきりと聞き取れた。

(しめた)

元正はほくそ笑む。彼一人の手には余るが、これは是非、長可に知らせねば。

そろそろと塀を下りる。後少しで地面、と云う高さまで至った処で、しかし元正は固まった。どうした訳か、それ以上降りられなかったのだ。

上を見上げて、元正は唸る。

理由は明白だった。

件の旗指物が、木の枝に引っ掛かっている。

この旗指物、長さは九尺(二m七〇cm)にも及ぶ。どの家よりも目立たせようと、鳥尾を通常の倍にして、出来うる限り高くに掲げ、だがそれが、樹に絡み付いて動けなくなっていた。

元正は足掻いた。肩を上下し、あるいは捻り。枝が揺れ、葉が不自然に騒めく。果ては猿の如くに両手で枝を掴み、全身を揺らして漸く旗指物が枝から取れた。

そうしてそれと同時に体勢を崩して地面に落ちた 三の丸の、内側に。

武田勢の視線が、一身に注がれた。

元正も、彼等の顔を凝視した。

お互い確かと思つめ合い、

「……く、曲者、曲者オ！」武田の武士が叫んだ。

戸と云う戸から、武田勢が湧いて出た。速やかに元正を取り囲む。拔刀し、弓槍を掲げ、ジリジリと間を詰める。

元正の命運は尽きた。

(……南無三！)

元正は拔刀した。自刃は不可能、退く事は不如意、ならば残るは討ち入るしかない。

猿叫と共に高く刀を振り上げる。その勢いのまま敵の群に突っ込んだ。最前列の、怯んだ者から首が飛ぶ。胴が地に倒れ伏す間に槍を奪う。

たちまちの内に血の池が出来た。一人を串刺しにし、そのまま水平に振り廻して三人を薙ぎ倒した。起き上がるうとする者は踏み付け、向かって来る者は突き返し、弓を射んとする者は突かれた死体の下敷きになる。

一方その頃、二の丸を未だ攻めあぐねていた信忠は、遠く三の丸で何かがざわめく音を聞いた。

土塁の上で爪先立ちし、そちらを窺う。見えたのは異様に長い旗指物とそれを囲む武田軍。僅かに見える、指物を背負った後ろ頭は、何処かで目にした事のある様な気がする。

「長可！」^{チョウカ} 信忠は呼ばわった。「あれはお主の家のものではないか？」

よじ上って隣へ来た長可も信忠と同じものを目にし、そうして嘗て見た事がない程に青くなった。

「あれ、誰」

「……と……当家の士、各務兵庫（ごむすけ）と申す者なり！」

「各務？ 宿老の？」

信忠の問いに答える間もあらばこそ、長可は土塁から飛び降りて走り出す。

「小次郎！ 五郎右衛門！」 駆けながら叫んだ。「直ちに三の丸を攻めよ！ 兵庫助を死なせるな！」

「待たれよ、勝手に持ち場を離れるな！」

越中守の抗議もむなしく、森家の者達は三の丸に流れて行く。

その頃自棄（ヤケクソ）糞になつて槍を振り回していた元正の足下には、武田勢の屍が累々と転がっていた。

何と云つても、二〇歳の折に他人の屋敷に独り討ち入を果たした男である。若かりし日を思い出し、年甲斐もなく暴れ回っていると向かって来るものはいなくなった。ならばと彼の方から相手を求め

て縦横無尽に駆け回る内に森家の救援が駆けつけて、果たして元正は三の丸攻略の端緒を開く事となったのだった。

これに切れたのは、真面目に務めを果たそうと布陣していた者達である。

「彼奴を今すぐ切腹させて下され！」

と云つて来たのは坂井越中守と河尻秀長。

その他、河尻秀隆は顛谷こめかみに影の出来る程血管を浮かせてわなわなと打ち震え、長可と同類の団忠正は、先を越されたと地団駄を踏んだ。

「……と、とりあえず、三の丸へやる筈だった者共を勝蔵の担当だった処へ廻せ。愚痴と雑言は後回しだ。又とない機会であるぞ、掛かれ！」

檄を飛ばしながら本陣へ帰つて、卒倒しかかっている一益の肩を軽く叩いた。

「大丈夫だ。お主は能く働いておる」

「……士卒が聞く耳持たぬでは、儂等はどうやって戦えばよろしいのですか」

「諦める。それを何とかするのが儂等の仕事だ」

そんな大将達の会話を知る由もない森家一同は、着々と三の丸の庭に死体の山を築き上げていた。

無傷の連中は建物の内に撤退して守備を固めてしまい、今際いまわの断末魔より他に敵の声はない。流石に中を制圧するのには数が足りないと考えた長可以下の近習は、額をつき合わせて軍議を始めたのだった。

「やはり手勢を寄せて貰うべきではないかと」

そう林長兵衛為忠が提案すると、

「他の連中が貸してくれると思うか？ 自分がやりからかshという何やが」

哀れっぽく元正は項垂うなだれる。

「後詰めのない処を見るに、大殿もさぞやお怒りでござろうなあ」

とだもとびえもん

戸田基左衛門が空を仰げば、全員の口から重い溜息が漏れた。

「お前等、何をそんな落ち込んだるんじや」

一人鼻歌混じりの陽気さを保っているのは長可。

「後詰めなんか要らんやら。ウチで三の丸取ったたら良えげ」

「ですが、手勢がこれだけでは討ち入っても返り討ちにされるだけでは」

「タアホ 警阿呆。正面から行こうとするで駄目かんのやろが。頭使わな」

云って三の丸の城壁を顎で示す。「彼処あそこから上りや良えやん」

一同、示された先に首を向ける。三の丸の側面の壁、攻め手が容易に入れぬ様にと高く高く土塁を積み上げ、また空堀も掘ってある。しかし土塁を上り切れば壁までは手の届く距離、そしてまた周囲に生えた山毛櫨フナやら唐松カラマツやらの枝が、丁度良い感じに土塁の近くまで伸びている。

何度か仲間内と壁とを見比べ、瞬きして、近習達は互いに見つめ合いながら笑みを浮かべた。

破 十四

さてその三の丸に後詰めを寄越さなかつた信忠であるが、別に森家に対して怒つていたのではない。

周囲の部下が怒り狂つて長可への手助けを厭うたのは事実であるが、意外にも三の丸にはそれ程の大勢を配していなかつた風であつたし、それ以上に、本丸及び二の丸の守備が堅かつたのだ。

「が、森家の動きが鈍いな」

二の丸では大年寄りから女子供に至るまで弓槍を持ち、絶え間なく石を降らせて寄せ手を押さえ続けている。攻略には時間が掛かりそうだった。一方の三の丸側も一旦は建物内に侵入したものの、直ぐに庭に押し戻されてしまつた様子である。

折角元正が掴んでくれた糸口を無にする訳にはいかない。

「越中、うぬは三の丸の手助けをしろ」

越中守は見るからに嫌そうな顔をした。

「鬼武蔵がここで討ち死にを果たすは、実に彼奴らしい死に様であると思ひます。イヤまつこと惜しい人材を亡くしました。残念です。美事な最期でした。彼奴の旧領と志は私奴がわたくしめ必ずや継いでみせましょう。さらば鬼武蔵、安らかに眠り候へよ、南無妙法蓮華經 Amen」

「やかましいわ、とつとと行け」

越中守を蹴り出した処で、不意に三の丸の方向が騒がしくなつた。すわ武田の反撃かと陣を飛び出してみると、何やら屋根の上にごめくものが在る。

太陽の光を弾いて、それは目映くきらめいている。

長可だった。

誰も彼もが惚ほけて彼を見上げている内に、屋根にわらわらと人が湧いて出て来る。次に各々しゃがみ込んで、屋根瓦を剥がし始めた。瓦を四方八方に放り投げ、その場所に槍を突っ込み、そうして梁も

引き剥がす。

……彼奴等は一体何をしているのか。

そんな問いを発するものさえ居ない。

やがて彼等はおもむろに立ち上がると棒の様なもの　よく見る
とそれは鉄炮てっぽうだった　を手に持った。

早合を巢口に入れ、槊杖で突き固め、火蓋を聞いて火皿に口薬を
詰めて右手に摘んでいた火縄を火挟に挟み

それを真下に構えて、長可達は撃った。

破 十六

近隣の雀達が一斉に飛び立った。

微かな女達の悲鳴も、堀を挟んで聞こえて来た。

敵も味方も唯々呆然とするばかり。つまり森家の連中は、屋上に上つて屋根を引つぺ剥がし、そこに鉄炮てっぽうを打ち込んで敵を殲滅せんとしているのであるが……古今東西、誰がこんなばかげた戦法を考へついたであろう。

「……斬新過ぎるわ」

思わず呟いてしまった信忠だったが、すぐに正気に返って首を振った。

「河内。肥前も！ 早う三の丸へ、下から挟撃せよ！」

トンでも戦術であろうが何であろうが、有効な策なのは間違いない、と思われる。

戸惑いの表情を浮かべつつも、長秀と秀隆の行動は迅速だった。

速やかに彼等は三の丸の一階を占拠する。

敵も動揺しているのを幸いに、本丸の為に下げたおいた何隊かを三の丸に振り分ける。二階にいたのは上下階の様子が判らずに狼狽する者と三階から命からがら逃げて来た者、下から怒濤の如く攻め上がる軍勢に、為す術なく討たれてゆく。

そうして三階に上がった屈強の者達は 眼前の凄惨な光景に思わず息を呑んだ。

動くものは誰もいない。酸鼻と云う言葉が生易しく感じられる程に、部屋は死臭と血と硝煙の臭いに満ち満ちていた。老若男女、得物の有る無しに拘らず、悉くが死んでいた。

「武士の所行じゃねえ……」

と、数多の戦場を駆け抜けた筈の越中守が漏らした程である。

当の長可達は、屋根の上から降りて来ない。屋上の、非常に見晴らしの良い景色に、別の事を思い付いていたのである。

「お前等、ヨーイ」

長可は右腕を振り上げた。

「撃^て！」

鉄炮衆が、揃って本丸に鉄炮を発射した。

「……彼奴、天才かも知れぬなア」

半口開けて真上を向いたまま、信忠はたなびく煙を見守っていた。成程あの位置ならば弓衆を付けなくとも有効に鉄砲を運用出来るであろう。本丸から弓を射るには少々遠いし、下から上るものがあれば逐次撃ち落としてゆけば良し、……兜に隠れて長可の顔はよく判らなかったが、さぞや勝ち誇った表情をしているであろう事は容易に想像出来た。

「殿オ！」

もつとも、味方から強烈に鬨^{ひんぎゃく}を聞く行為であるのも、叫びながら寄って来る秀長を見ればよく解る。

上であらかた殺してしまえば、地上で幾ら槍を振り回しても手柄にはならないのだ。

「あいつ撃ち殺して良いですか」

「待て。落ち着け。鬼武蔵^{おにむさし}は仲間だ」

「彼奴を生かしておいては駄目です。世の為人の為、今すぐ討ち滅ぼすべきです！」

「解った解った。今回の論功については勘案する。だから陣に戻れ」云い合う間にも再び発砲音がする。

（あやつ……女子供も見境なく殺りからかしとるんやらあなあ）

秀長の背中を見送りながら、風に乗って耳に届く悲鳴と歓声に信忠は密かに溜息を漏らす。

（姫子共はあらかじめ逃がしてであると良いのだが……源三郎を使つて聞き出すしかないか）

森家が大量生産している死体の中に、姫が居ない事を祈るばかりの信忠だった。

破 十七

噓せ返る程の戦の臭い、目に残るのは血の紅ばかりの城の中、諏訪はなは、良人の討死を耳にした。

諏訪勝右衛門頼清、武田家当主である勝頼とは従兄弟違いの間柄、享年四二歳となる。諏訪一族の一人として、かつては高遠氏 諏訪一門のものであった城を守つての討ち死にだった。

開戦から半日。日は天頂を過ぎ、照らされるものは、徐々に橙を帯びてきている。趨勢は既に決していた。武田側は潰走し、残った僅かばかりのもの達が各個撃破を待つばかりとなっている。良人は敵中に自ら突進したと云うが、もはやその亡骸にまみえる事はないだろう。

はなは右手に握った小刀を見た。

血はついていない。もとより自害の為に握った刀である。もはや女一人がどうかした処で、変えられるものは何一つない。

「逃げられよ」

誰かが云った。だが今更何処へ落ち延びよと云うのか。諏訪は滅ぶ。武田も滅ぶ。頼清とはなの間に子は居ない。たといここを逃げ仰せても、早晚実家も滅ぶだろう。

はなは両手で小刀を握りしめた。一声鋭く「応！」と叫び、呆氣に取られる男達の脇を擦り抜けて、北の曲輪へ駆け出した。

遠くに叫び声が聞こえる。一拍おいて擦れ合う具足の音も。

落城は時間の問題だ。仁科盛信も、このままいけば直に討たれるだろう。

「アレ、諏訪の方」

右手から声がした。振り返れば若衆が一人、彼女の後を追っている。その左手には弓。右手には長刀。

「それでは喉元まで寄らねば敵は斬れますまい。これを御持ちなさいます」

右手を差し出して若衆は云う。「それでは、拙者これにて。今生のおさらばを」

若衆が向かったのは御台所、はなが向かうは北曲輪、味方の武士を掻き分け掻き分け、右三つ巴旗印と黄地の永樂銭に立ち塞がって、あらん限りの声で叫ぶ。

「遠からんものは音に聞け、近くば寄つて目にも見よ。我こそは諏訪の神氏、勝右衛門が妻、尾張の殿腹、これより見候へ、日本一の女の死に様よ」

せめて盛信の自害の間でもと、はなは織田家の中に突っ込んだ。

破 十八

そうして 何の感情も抱けぬままに、織田信房はその首級くびと対面した。

首実検の場、並べ立てられた四〇〇ばかりの首桶の、最も念入りに白粉紅を施され、高く高く鬚もことりを結われた、折敷に乘せられた頸一つ。

仁科五郎盛信の成れの果てであった。

「仁科盛信に相違いないな」

床机しきの向こうに、弓杖をついて立つ信忠が問う。

「……私よりも、保科殿や小笠原殿に確かめられたが宜しいかと存じます」

「あやつ等が嘘を云わぬとも限らぬでな、念の為だ。其許は勝頼の養子なれば、盛信の顔もよく見知っておろう」

信房は無言で盛信の首級を見つめた。両の目をつむった死人の顔からは、当然であるが何の情念も読み取れはしない。

首札はなかった。ならば盛信は自害したのだらう。雑兵の手に掛からずに済んだ事を喜ぶべきなのか、それともこんな処で果てざるをえなかった無念を悼むべきか、信房には判断がつかなかった。

（盛者必衰ってこんけ）

不思議な事だと、首級を見下ろしながら信房は思う。武田に居た時分には、まさか自分の命運より先に盛信や勝頼の命が尽きるとは思いもよらなかった。四ヶ国の太守だった武田家が、あの信玄公の息子である盛信が滅びる日を、この目で見、耳に聞く事になるとは「で、どうだ」

太刀の柄を鳴らしながら信忠が重ねて問う。

「……相違いございません」

「で、あるか」

信房が門の内に入った時、外には昆布と盃の置かれた首級のない

桶が在った。そもそも実検はもう仕舞いの頃、日も落ち、夜の虫が楚々と鳴く頃合いなのであるから、盛信の検分は随分前に終わっている筈である。

敢えて信房を呼び出し、作法も何も無視して確認させた意図は何か。

（内応しちよか確認すらけ？）

先だつて突出した事について、信忠からの咎めはなかった。気が済んだなら槍働きに励めと云われ、何事もなかったかの様に陣に戻された。

だからと云つて、彼が信房に対して無警戒でない事は、さりげなく信房隊に付いて廻った団忠正の存在が示している。そしてその通り、信忠の命令に唯々諾々と従う気は、信房にはない。

信房が率いる犬山衆。その半分は元岩村衆。信房と共に甲斐へ送られた者達である。本意でなかったとは云え、七年も過ごせば知り合いも出来るし、情も沸いてくるものだ。よしみを結んだものの中には高遠城に籠つて果てたものも居る。

（織田家に知己が居んでもねえし）

信房の懷には帳面が在る。今回の出馬にあたつて織田家中の旗標をまとめたものを、信忠から賜つたのだつた。

帳面に描かれた柄を突き合わせなければ、彼には織田家の武士の見分けがつかないのだ。

（ずで帰る気無かつたかな）

甲斐に送られたのは信玄の上洛戦の真つ直中だつた。正式な人質だつた訳でもない。間に長篠の合戦も挟み、いつ殺されていても仕様のない身であつたから、生き延びる為にそれこそ死に物狂いで、彼は武田家に順応した。

実父信長は御坊勝長の帰還を両手放しで喜んだが、他も同じ考えとは限らず、不審の思いを抱かれるのは仕方のない事である。

実際、信房は織田家に不信の念を抱いているのだから。

首級が下げられても、信房は退出の許可を得られなかった。検分

が終わるまで付き合わされて、それから別の場所へと伴わされる。

途中で通り過ぎた織田家の人間はすっかり戦後の気分だ。鎧を脱いで酒にうつつを抜かしたり、城の中で手に入れた平家物語を掲げて周囲に自慢したり。

「と云った次第でございますから、私の言葉があればこそ、長兵衛の功があつたのです！ だから声を掛けた私が一番槍！」

「結果が全てでございます。何であれ先に座敷に上がって首を上げたものが一番です！」

各家の論功行賞も盛んな様子である。

勝蔵、手負いか

云い争っていた二人の前に坐る小男に向かって、信忠が声を掛ける。二本の槍を見比べていた男は首を巡らせ、左手に視線を遣って肩を竦める。

「大した事はありません」

「イヤ。腰から下、血で染まっておるぞ」

「敵の血でございますれば、どうぞ御気になさらず」

……男の後ろには真白な旗指物、どうやらこの男が屋根葺衆

三の丸屋上での銃乱射について、早速森家の連中は渾名されていたの棟梁らしい。

連れていかれたのは首捨場だった。先程の男達等によって討たれた、有象無象の数首と共に打ち捨てられた胴や女子供の死体の中には、信房がよく知るものも在った。

その内の幾つかを改めさせられる。何れも女ばかりだった。

「今の内に松は在るか」

真面目な顔をして訊く信忠に、信房は真剣に惚けた。

「……何かの隠語でございまするか？」

「違う、松だ。信玄の娘の。儂の妻になる筈だった」

しばらく意味を解しかねて首を捻り、漸く『松』が『誰』の事を指すのかを理解した。

「新館御寮人でございまするか」

「新館御寮人？」今度は信忠が問い返す。「於松は誰かに妻取られたのか？ 誰に？」

「御寮人は殿と結納なされたのでは？」

どうにも話が噛み合っていない気もするが、苛々する信忠を見ていると少し気が晴れたのでこのまま放っておくとした。

「じゃあ新館つてのは何だ」

「躑躅ヶ崎の別館の事でございます」

「その別館は何の為に建てられたんだ。新館で御寮人つつたら室に入ったと云う事やないんか？」

遅々として進まない会話に焦れて、信忠は左手の扇を閉じたり開いたりを繰り返す。内心で舌を出しながら、しかし太刀に掛けられた右手が怖かったので信房は切り上げる事に決めた。

「御安心下さいませ。私の知る限りでは御寮人は独り身の筈です。

躑躅ヶ崎の新館は殿との御婚約をことほいで建てたもの、御寮人は殿との御成婚まで武田で預かっている扱いでございます」

たとえ織田家と絶縁し、今生で結ばれる事あたわずとなっても、

新館御寮人 松姫の扱いは信忠の婚約者のままだった。宙ぶらりんになっていたとも云える。それが松姫の意思に拠るものか、御家の事情があつたのかは信房が知れる立場ではない。

信忠の方は、理由は気にしないらしかった。判り易く上機嫌になると「そうか、そうか」と二度頷いて、もう一度見せた首の中に松姫が居ないかどうかを確認した。

「今見た中には居られませぬ」

応えたと更に頬を緩める。

「新館御寮人を捜して如何なさるおつもりですか」

「自分の妻を捜して何が悪い」

「……確かに、穴山に武田の名跡を継がせるよりは御寮人の子を立てた方が受けが良うございましょうが」

「うん、まあそう云う事だ」

「恨まれているとは御考えにならぬので？」

仁科盛信は、松姫の同母兄である。

「何故？ 殺し殺されは乱世の倣いだ。於松も武士の子ならばそれ位はわきまえておろう」

ああ、他人の痛みを解さぬ人なのだと、落胆と共に信房は理解した。

「儂等の母御も良人おつとに実家を滅ぼされておるが、別に恨んでなぞおらぬぞ」

建前と本音は違うものと、誰か信忠に教えなかったのだろうか。後ろ盾を潰されてしまった以上、たとえ夫が敵であっても楯突く訳にはいかないのだと、そう云う身の上に思いを馳せた事はないのだろうか。

まあ正直に云えば、と信忠は続ける。

「名門の血が欲しいわな。ウチは守護代の奉行の出だし、御方様は美濃国主つつても元は油売りだし、土岐家の血は庶流だしな。正直血統だけなら先刻居た各務の方が余程やんごとないからなあ」

「でしたら内親王でも賜ればよろしいではありませんか」

「ウチは今宮家と揉めとるで駄目かんわ」

京の陰陽寮の暦と伊豆の三島暦とで閏月が異なっていると云うので、前の年から土御門家つちみかどを呼び付けたり、在野の業者と議論させたりと改暦への調整が続いている。尾張の国人衆は三島暦を多く使用しているから閏月を天正一〇年一二月としたがっているが、京も暦道の総本山としての意地がある。閏月は翌一一年一月であると断固として譲らず、朝廷側もこれを支持している為に問題は膠着状態に陥っていた。

既に天正一〇年は三月、朝廷は時間切れを狙っているのだろうか、下手に長引けば信長の癪癢玉が爆発するだろう。

ちなみに、織田家側に譲歩する気は全くない。何度計算させてみても、京暦の方が間違っているからだ。

「そもそも殿は既に御子がいらっしやいますでしょう」

「ああ、うん。どっちも妾腹だから」

「……まさか未だに未婚とか？」

「行き遅れとか云いやがったらぶん殴るからな」

「行く方ではないですからね」

云い方が気に喰わなかったのか、扇で頭をはたかれた。

「お前は良えよな、武田でも嫁を貰って、こつちで貰った妻とも上手くやれてよ。こちとら女難の人生歩んどるじゃ、好きこのんで行き遅れとる訳やないでな」

（あ、ヤベ。なんぞ琴線触れたけ？）

地団駄を踏む様は、どう見ても餓鬼だ。

「……まあ良えわ」ひとしきり愚痴ってから、信忠はふと思いついた様に信房に目を向けた。

「そう云やお主、こつちに帰る時に別れた嫁は今何やとらっせる？ 信濃衆の誰ぞの娘なんやら？ この際犬山に連れて帰ったらどうやね。兄の情けや、屋敷位用意したるぞ」

信房は息を呑む。

照れ隠しで云ったのか。はにかんだ風に口の端を上げ、信忠は頬を掻いた。

夜気を吸い、競り上がって来るものをやり過ごして精一杯の笑みを浮かべ、信房は云った。

「屋敷は結構でございます。もしも御慈悲がございますならば墓をひとつ、丁度先程、奥の死体を目に致しましたゆえ」

破 十九

「織田源三郎信房？」
けんざぶろうのぶらや

湯呑みに目を落として、城八郎は問い返す。

「そ」白湯を一口含んで、とよは頷いた。「知つてはる？」

「うんにゃ」城八郎は否定した。「知たん。誰か、そいは？」

「右府さまの五男坊さま」

「どけの養子じゃ」

「去年までは武田の養子やったね。ほれで、去年の十一月やったかな、返されて来はったの」

「武田」城八郎は呟く。「人質か？」

三月に入り、武田の劣勢は遠く京まで伝わって来ている。桜花舞い散る風情は、盛者必衰、春の夜の夢のごとくを体现していた。

御所を眺める茶屋の末席で、城八郎ととよは残り一個の餅を前に向かい合っている。

「濃州の岩村いう処の養子になつとつたんやけれどもな、そこが武田に落とされたん。ほれで、そんな時に甲州に送られはったんやと」

日差しは既に初夏のそれ、真白に輝く往来とは対照的に、店内は暗い。

「よお無事じゃったな　で？」

「十四、五年前にな、今度右府さまが止宿しはる成菩提のお寺のお堂が焼けはった時に、お寺ん中でお産がおしたそない（あつたそう）なんやつて。で、その時止宿しとつたんも、右府さま御一行なんそやけどもね」

「それがいけんした」

「その時産まれはつたんが、源三郎さまやおまへんかつて話」

「……はん」城八郎は鼻で笑う。「突拍子無つがらんね。御台に子は居ん。まして男子やれば嫡男になつとらん筈がなか」

「色々事情がありはつたんかもしれへんよ。そんな頃には三位中将（

織田信忠）が御台の養子になって大分経つとつたはずやし、側廻そばまわりも美濃衆が固めてはった。後継で揉めたくへんなんだのかもなア。齋さい藤家とうはほれで滅亡したみたいなもんそやさかいに」

「阿呆か。おまんは武家のしきたりを何いも解つておらん。第一、証拠はあつとか」

「あらへんよ。やてお寺に何でか安産祈願の人が多いんはほんま。

安産柿云うんがあつてね、何でじゃも火事ん時、その柿に慈恵じけいたいし大師の書像が引つ掛かつて火が鎮まつたんやと」

「胡散臭い話じゃ。ゆうとあう寺縁起だな」

「まア、せやけどね」

「とよも苦笑する。」

「大体、十四、五年前ゆうとが上洛の頃じゃろ。止宿つてのはおまん、もそいどんて（もしかして）軍勢引き連れて京に上う途中でか」

「せやよ。近江の柏原かしわばら」

「阿呆！ こいからん戦場に行つちゆう時に妊婦に触れう大莫迦ばかすつ者がどけに居つか！ 流言飛語に決まつとうがる！」

「叡山焼き討ちしはる様なお人やねんよ。呪いの類をお気にしはるとは思えへんなア」

「廻りが止むうわ。仮に気にせんかつたとて、姫を態々しやこせつ戦場にそれも上洛の大事に連れ歩ん訳がなか」

「例えばやなア、護摩堂の火事が放火やったとか」

「とよは残つた餅を一口で食べ、白湯で流し込む。」

「御台が子をお産みになりはるんが都合悪いお方は、ぎょうさん居はつたやろね。刑部大輔（斎藤龍興）どのが美濃を追われはつたのがその前の年やったし。尾張の殿様が国讓状を盾に美濃に入りはるんは角が立つけど、御台との間に御子が居らはつたら話は別やからな。御台の父方は美濃国主斎藤家、母方は美濃国守護、土岐庶流の明智氏や。」

范可はんか（斎藤義竜）どのは一色左京大夫を名乗りはつたけれど、御台は間違はなく斎藤の血も土岐の血も引いてはる。ついでに云うと

土岐氏は摂津源氏の流れやさかいに、御台に御子がおいでなすつたらそん子を征夷大將軍に任官させる事も出来なくはあらへんなア」「下らん。信長が揚羽蝶を掲げ申すは俺でも知つちよる」

揚羽蝶は平家の家紋、平氏後裔を自称する織田信長はしばしばその紋を用いていた。

「源三郎云う名乗りもな、三郎は代々弾正忠家嫡男だんのじょうぢゅうの通り名やさかに。右府さまも弾正忠（織田信秀）どのも通り名は三郎おますけど三位中将さまは勘九郎。

まア勘九郎は入道道三どのの通り名やさかい、美濃に対する含みもありはったんかも知れへんけど」

「嫡男にすつ気がなかと者に何故三郎の名をつけるんじゃ。そも『三郎』じゃねっせえ、『源三郎』じゃ。北畠（信意）も『三』介だの」

「源三郎の『源』の字は源氏を表しとるのかもしれへんよ。右府さまの従二位右大臣は源実朝さねとも以来の任官やし、近衛右大将云うたら頼朝所縁の官位やないの、そう平家にこだわってはると思えへんでおますなア。

右府さまん子で織田姓を持つとる元服済みの男子は、三位中将と源三郎さまだけや」

「処遇が決まうまでん措置じゃつどが。武田から帰つ来って未だ半年もたつちよらんそげな。こじつけもええ所だの」

「処遇ならもう決まっとるやないの。犬山城主で中将さまの与力。

嫁も池田の女やし」

「劳いじやる、人質の。　　ないごてそげん御台の子に拘るんじゃ。

母方が誰かなぞどうでも良からう」

「わかつとらへんなア」

とよは湯呑みを置いた。

「弾正忠家は織田氏の流れ。その織田氏は本姓は藤原やとか桓武平氏やとか自称してはる。御台の母方は明智家、これは先刻云うたけれど土岐氏の庶流、土岐氏は摂津源氏頼光流の流れで鎌倉以来の名

家や。

今、朝廷ん中ではな、武田との戦を討夷とみなして將軍宣下（征夷大將軍任官）させるか、それとも太政大臣か関白かに推任しようしてはるん。もしも右府さまが幕府を開きはるおつもりなら將軍宣下を受けなあかへんけども、鎌倉の政所以来お武家はんで平家が就いた云う前例はあらへん。決まりになつとる訳やおまへんけど、お武家はんは避けはるみたいやね。太政大臣は、平清盛公がならはつた前例があるけども、関白になりはつたお武家はんはそもそも居らへんな。

もしも右府さまと御台との御子が居らはつたら、右府さまが就かんでもそん御子をどれかに就けたらええ。平氏筋も源氏筋も、誰も嫌な顔をする人は居らへんやろ。源平合戦から四〇〇年、お武家はんの棟梁で源氏平氏両方の流れを立てたお方は出て来とらへん。強いて云うなら鎌倉の二代目と三代目がそうやったけれども、あそこは源氏の宗家やからなア。加えて右府さまは五宮（邦慶親王）を猶子うしにしておいではる。これで摂家辺りから御子へ女でもあてはれば織田家の中に宮家も公家も平氏も源氏も混じりはるね」

「そいは信長が朝廷を降し申すゆとう意味か」

「そゆこと」

「じゃつち、信長は源三郎とやらを後継に立てちよらん。岐阜殿の廃嫡もしちよらんかった。織田の当主は岐阜殿じゃ」

「せやね。やけど右府さまに継がせる気がおまへんでも、廻りが担ぐ云う事もありはるやろ。中将廻りの美濃衆、右府さま重臣に馬廻り……安藤、竹中、日根野、明智、稲葉、斎藤……」

「……成程な」

城八郎は外に目をやった。見えるのは行き交う人々と上げられる土煙、禁裏を囲う新緑。近江坂本城は見える筈も無い。

だが今、城八郎の脳裏には、そこに居坐る兵衛の姿をはつきりと思ひ浮かべる事が出来た。否、既に城の主は出馬しているのだから、もちろんそれは幻なのであるが。

……連日、得体の知れないもの達に云い寄られる光秀に、少し同情しなくもない。

「で？　ワイ等はいけんする。主君押し込めに賛同すうんか？」

「それはどうやらね」

とよもまた外を見る。

「右府さまはお父上の代から朝廷に貢献してくれはったけれど、所詮は越前忌部^{いんべ}氏の出、公武^{こうぶ}合体を面白く思わへん方々はぎょうさんおますやろなア」

破 二十

「デ、正直な処はどうだ。アレは」

信忠は問う。

「どうしてどうして。中々の土にござる」

「上様の息子だからとおもねる必要はないからな」

「恐れながら」と、困惑気味に述べたのは越中守。「犬山様の槍働きの美事な事、三七郎に勝るとも劣りませぬ」

信忠が無言で彼を見遣ると、その右隣の忠正も苦笑しながら同意する。

「幼きゆえ、何かと危つくございますが。御年を考えれば充分すぎる御活躍と申せましょう。少なくとも、私奴わたくしめがあの年頃の時にあれ程の働きを見せよと仰せられても無理にございます」

「三七郎様と違つて融通が利きますゆえ」そう頷いたのは長可。「正直な処、御坊様の方が動き易うございます。なにぶん三七郎様はほんの僅かな軍令違反も赦ゆるしませぬので」

「否、そこは命令を聞けよ」

顎に手を当て、鼻っ柱に皺を作つて信忠は唸つた。高遠城の始末も済み、近しい諸將と軽く杯を重ねながらの夜半である。

訊いたのは弟、信房について、今の処取り立てて粗相も密通もなく、信忠としては面白くない事この上ない。まして斯様に褒めそやされては。

「そう云えば彼奴の初陣はいくつの時なのだろうな」

信房は今年数えで一五歳、信忠廻りの侍大将の中では最年少である。同じく信忠の弟である神戸信孝の後釜として連枝衆れんししゅうに入った訳だが、その信孝は二五歳、信忠が二六歳で、長可や忠正等々もこの年代か、これより上ばかり、信房だけ一回り年が違ふ。その中で、新参ながらもそこそこ上手くやれているのは、実は凄いい事なのではなからうか。

信忠が一五のみぎりなど、未だ元服もしていなかった。一方、信房は武田時代に元服を済ませ、本人曰く勝頼に随いて戦にも出馬していたと云うから、成程優秀なのも宜なるかな、なのかも知れなかった。

帰還の折に赤ん坊を伴っていた事と云い、何かと予想外な弟である。

「団や越中はどうだ。三七より有能と思うか」

問えば忠正や越中守は云い淀む。新月の夜は暗く、明かりは暖を取る為の焚火しか用意していないから、その表情はよく判らなかつたが、信忠に都合の悪い顔をしているのは確実だろう。

ややあつて、遠慮がちに越中守が口を開いた。

「年の差がありますゆえ一概には申せませぬが、度胸の点では、おそらく」

「で、あるか」

「ですが殿程ではございませぬ」

「おべっかは結構」

杯を傾けた信忠を、当惑して見詰める忠正や越中守の目が気に喰わない。

「主が優れたるは、我等にとって仕合わせが良い事。喜びこそすれ、厭う理由はございませぬ。無能な将の下で果てる程の無念はありませぬから」

長可が云った。キ、と睨み据えた信忠を冷めた目で受け流し、「殿、飲み過ぎです」

信忠は舌打ちした。残っていた酒を一気に飲み干し、杯を膝に転がすと、手を振って彼等を払う。

「もう良い、下がれ」

云われて互いに顔を見合わせながら、信忠に暇を述べて去っていく彼等を見送り、信忠はおもむろに立ち上がって杯を火にくべた。杯は形を変えない。

？が赤々と燃えて爆ぜ、傍の木が炭に転じても、ただ横たわるだ

け。

「主が優秀なのは良い事」

信忠はひとりごちる。そんな事は解っている。身に沁みて知っている。

だからこそ、忌々しい。

破 二十一

そして、翌朝。

「どうか諏訪大社は御見逃し下さい」

「うるさいな。お主はとつと高島に行つて城を貰つて来いよ」

「殿は諏訪さまを侮つておいでです。御社を焼けば、諏訪の民衆悉くを敵に回しますよ」

「御柱は再来年だろう。それまでに社を建て直せば良いではないか」
「それだけではございませぬ。御社宮司を害するは諏訪の山々に徒^{あだ}なす事です。必ず報いを受けましようぞ」

信忠は振り返り、取り纏る信房を意外な思いで見下ろした。

「信心深い織田家の子と云うのも不気味なものだな」

「どうか御再考下さいまし」

「お主いまどき神罰なんぞ信じておるのか？ 諏訪の勝頼が滅びる今になつても？」

「人如きには理解出来ぬ神秘など、世の中には沢山ございます」

「だったら今すぐ神罰とやらで勝頼を救つてやれよ。泣いて喜ばれるぞ」

顔を歪めた弟に、信忠は諭す。

「良いか源三郎、この世には神罰だの奇跡だの、そんなものは在りはせぬ。もしも奇跡に見えるものがあつたとしても、それは人の行いが積み重なつた結果だ。人が瑞兆だ凶兆だと騒ぐものも自然の摂理、思い込みに過ぎぬものだよ」

「ですが、たとい左様であつたとしても、諏訪さまが人心の拠り処であるのは間違いございません」

「だから問題なのだ。なまじつかな歴史と権威と支持が在るから専横しても墮落しても誰も止められん。拝み屋は大人しく社に籠つて祝詞を挙げてれば良いものを、利権欲しさに俗世のまつりごとにまで口を出して来おる」

「諏訪さまが何時、殿に対して強訴致しつそしましたか。予断で害そうとなさらないで下され！」

「武田に対してやっていたのにウチにやらない道理はないな」

部下達は揃なっている。この場に居ないのは既に新府へ先走らせたもの、あるいは長益ながます（織田源五郎、後の有楽斎うらくさい）の様に城を明け渡されてその処理に当たっているもののみ。

止めるものは誰も居ない。諏訪の薫陶を受けて育った筈の木曾義昌や保科正直でさえ、意見しようとはしない。

（薄ら汚いものだ）

そう思いはしたが、一方で、延々反対され続けるのも鬱陶しい。

「大大名に成り上がって調子に乗っておいでか、それとも歴史や権威やに劣等感がありなのかは存じませぬが、殿のなされる事も平安の僧兵共と何らの差もございませぬぞ。それとも御自らが神仏に成り代わるおつもりか？ 庭の置石を上様に見立てて拝ませた様に？」

「それは上様の柿代稼かぎだから」進む足を止めて、信忠は溜め息を落とす。「お主な、自分もその成り上がりの子なのだから、余り御家の悪口は云うなよ」

「そしられる様な事をなさるのはどなたですか！」

早朝の空気に、信房の叫び声が響く。信濃に入ってからというもの、朝っぱらから怒鳴られるのはこれで何度目であろうか。

淡く霞んだ空と美しい萌黄の木々に、日々の戦で荒んだ心がいくら洗われても、これでは元の木阿弥である。そう嘆いてみせると益々気色ばんだ信房に一瞥をくれて、信忠は思わず天を仰いだ。

「……何でこんな武田色に染まった子になったんだか……」

「殿」眉根を寄せて、長可が前に進み出る。「よもや、諏訪焼きを取り止めになさるおつもりでは」

「まさか。 派手にやれよ、天下に轟おおく大社おほやしろだからな」

「殿！ 天の御罰を被りますぞ！」

「……お主、実は諏訪の子が源三郎と入れ替わって帰って来たとか

……無いな」

これ程までに武田鼯鼠で、且つ神仏に敬虔で權威を敬う保守的な人物が、嘗て家中に居ただろうか。まじまじと、新鮮な思いで信忠は、親そっくりの顔を見つめる。そもそも何故目の前の人物がここまで武田家に帰依しているかが、信忠には理解出来ない。

信房が武田家に遣られたのは、政治的な意味での人質ではない。蒲生賦秀や、徳川家康の様に自ら差し出されて来たのであれば扱いも良かるうし懐きもしようが、信房の場合は拐されたと云って差し支えない。

岩村城の遠山夫人から、是が非でも養子を　それも何が何でも信長の実子を　と請われ、しぶしぶ信長が御坊丸を渡したら、それからたったの三年で城が落ちた。

しかも、寄せ手の秋山信友と遠山夫人とが夫婦になつての無血開城、御坊丸を岐阜へ逃がす　と云う訳でもなく城に留め置き、無事長じれば御坊丸を岩村城の主とする　と宣言した舌の根も乾かぬ内に、夜中にこっそり信玄の元へ送りつけたのである。

送りつけられた方も困惑しただろうが、信長はもつと怒った。これは御釈迦様でも切れるだろう。

更に当時は信玄上洛のまっただ中、翌年には長篠合戦、住み良いどころか命が取られなかったのが僥倖である。

これで出来上がった人格が武田大好きっ子なのであるから、人間の心根と云うものは誠に奥が深い。

「今度の禅問答（ぜんもんさん）の御題はコレにしよ」

ひとりごちる内に準備が整った。待つてましたと長可が火を入れ、期待に応えて火は盛る。

諏訪の神は蛇とも云うが、正しく蛇の如く、火はうねり境内を焼いてゆく。

「オウオウ、よう焼けよるわ」

信濃の国人は呆然とそれを眺めるばかり、織田家の連中の声だけが、炎の爆ぜる音に混じって訝する。

信房に目を向けた。炎に照らされ、朱くなつた鼻柱に皺を寄せ、その表情は阿修羅の様でもある。

（精々織田家を嫌うが良えわ）

信忠は思った。　　そう思う自分を、酷く醜いと思いながら。

破 二十二

『うやまつて申す 祈願の事 南無歸命頂礼 なむきちようみょうらい 八幡大菩薩』

背中からは妻の誓願が聞こえてくる。

『此国の本主として 武田の太郎と号せしより此かた 代々まもり
給ふ

ここに不慮の逆臣出来たつて 国家をなやます よつて勝頼運を
天道にまかせ

命をかるんじて 敵陣にむかう……』

諏訪明神は焼け落ちた。信忠旗下の軍勢は、勝頼一党の首を取ら
んと発進している。

『……そもそも勝頼いかでか悪心なからんや 思いの炎天にあがり
瞋恚 しんい（怒り）なを深からん』

新府からは人が消えた。高遠で信忠を防ぐつもりだったが、救援
に向かうより先に、わずか半日で城は陥落した。

上下の士も、家老でさえも、弓さえ取らず、守るべき筈の女子供
に紛れて山野に消えた。

『神慮天命 しんりよてんめいまことあらば 五逆十逆たるたぐい 諸天かりそめにも
加護あらじ』

三月三日、上巳 じょうし。桃の節句の日、釜無川に雛を流す代わりに城に
火を掛けた。

形代となつて焼け死んだのは、かつて武田が栄華を誇った時代に

集められた人質達である。

『此時にいたって 神心 わたくしなく 渴仰肝に銘ず 悲しきかな』

西から取り急ぎ来た伝令は、信長の出陣が三月五日に決まった事を告げた。

『神慮天命まことあらば 運命此ときにいたるとも 願わくば靈神力を合わせて 勝つ事を 勝頼一しんにつけしめ給い 仇を四方に退けん』

真田源五郎昌幸が、信忠からの書状を差し出して来た。内容は小山田信茂が提出したものとほぼ同じ。

そうして、これらの調略について勝頼に申告したのは、とうとうこの二人だけだった。

「岩櫃にお越し下され。難攻の地にございます。上杉も近く、ここで耐えて、再起の時を待つのです」

遠すぎる、と昌幸の進言に反対したのは信茂だった。いまだ山中は雪深く、しかし新府から岩櫃へ行くにはその山々を突っ切らねばならない。

道中の街道は織田家に完全に制圧されている。下手をすれば東側の北条との挟撃に合うかもしれない。

勝沼から駒飼へ、そして小山田家の岩殿城へ行くべきだと、信茂以下譜代家臣は主張した。

外様は信用出来ないの思いもあった。昌幸は信濃衆、そうして真つ先に裏切った木曾、小笠原も信濃の人間だった。

行き先は岩殿に決めた。その日の内に甲府を抜けた。

三日後、甲府は信忠に占領された。

七日、信濃に残っていた武田の一門衆が全滅した。

信玄の影武者として名高かった叔父の信廉のぶかども死んだ。

従兄弟の信豊のぶとよとは別れた。

生き延びた国人、親族衆はことごとく寝返った。

八日、織田に返した勝長かつながの案内で、織田長益ながます、団忠正、森長可等が上野に入った。

九日。先に岩村へ戻っていた信茂の家臣がやって来た。勝頼と対面し、

夜になって、勝頼と共に居た、信茂の母を連れて掻き消えた。信茂の迎えはなかった。笹子峠さしことうげで弓を向けたのは、小山田家の指物ものだった。

一〇日の朝、目覚めた時に勝頼の側に居たものは、前夜の半分に満たなかった。

そして一日　今、一行は天目山の麓、田野たのに居る。

勝頼の手元に残ったのは僅か四人。

一月前、一万五〇〇〇の兵を率いた男の、その結末がこれだった。

「御隠居様、ここでおいとま頂戴いたしまする」

土屋惣藏昌恒つちやそうぞう　まさつね、安倍五郎左衛門勝宝あべ　かつとみが膝を並べて別れを告げる。

狭い部屋の中、ほんの一回、膝の向きを変えるだけで息子信勝のぶかつの方にも向き、

「殿、今日が最期の御奉公となりましょう。吾等われらの勤めを見届けて、どうか御氣の済むままに」

齡十六になる、武田家最後の当主は微笑んだ。

「見るべき程の事は見つ」

昌恒の顔が歪む。

「波の底にも都のさぶらうぞ。……地獄でも御供に参ります」

未だ霧も払えぬ刻限から始まった戦闘は　果たして戦いと呼べるものであったかどうか。

鳥居畑とりいばた、四郎作しろうさくの二力所に陣を構えてみたものの、侍は四人、女子供を入れても百人あるかないか。殊に先陣である四郎作には両手で足りる数の武士しか居く事が出来なかった。もちろん、風の前

の塵の如く蹴散らされた。

殲滅である。

一昨日、環甲の礼を行なつて、甲斐武田家の最後の家督を継いだ信勝だった。その当主としての最初で最後の働きが、腹を切つて果てる事となった。

上臈衆はただただ袖を濡らすばかり、外は滝川一益の郎党に包囲されて鼠一匹逃げ出せない。

かねこさだみつ
金子定光が立ち上がる。槍を手に取り、勝頼を囲む家人達を見渡した。

「……女共は前に出よ」

その意味するところが明白だっただけに、彼女等はお互い顔を見合わせて凍り付いた。

「……前に出よ」

やがて、ためらいためらい、一人の年増が進み出る。

妻の乳母だった。

「一心頂礼 万徳円満 釈迦如来 真身舍利 本地法身 法界塔婆

……」

掌を合わせ、目を閉じ、震える声でしかしはつきりと经文を唱え始める。いつしか他のもの達も合掌し、或るものは涙を流し、また或るものは俯きながら一心に祈りを捧げた。勝頼も両手を合わせる。だが妻だけは誓願を終えても背を向けたまま、決して加わるうとはしなかった。

読経が終わると、乳母はすつくと背を伸ばす。一撃で彼女は絶命した。知己の屍を見て覚悟が決まったか、他の女達も立ち上がり、次々と定光の手に掛かつて行く。

最後に勝頼の妻を貫いて、生きているのは武士ばかりになった。一同、もう口を開く者はなく、勝頼に一礼して打って出る。

そして最後に。

「父上」

息子は笑った。手に十文字槍を持ち、母の屍を踏み越えて。

「然らば」

勝頼一人になった。酷く体が重かった。

三月二日、天目山。

ここに甲斐武田家は滅亡した。

破ノ急 一

「源三郎、源三郎け？」

背後から掛かった軽やかな声に、さなだけんざいさうのふゆき真田源三郎信幸（後の真田信之）は振り返った。

「御坊丸様」

かつなが思いがけない顔に信幸は目を見張る。昨年織田に返された、坊丸ぼうまる勝長が馬から下りて駆けて来る処であった。

「おまんも此方来てんけ。元氣けえ？」

昔と変わらぬ気安さで、勝長が跳ねる様にやって来る。勝長と信幸と。どちらも人質として甲斐の勝頼の元で育ち、年も信幸が一つ上なだけ、元服も近い時期であったから互いに何となく親近感の様なものがあつた。

「元氣つさあ……な訳ないずら。俺等負け戦じゃんけよ」

「負けたでえ？ おまんの親父殿もかよ？」

勝長の意外そうな声に、信幸は思わず顔が崩れる。織田方に戻つたとは云え、それまでの八年間を武田で育つた勝長にとっては、信玄の懐刀と謳われた真田昌幸こなたまさゆきが負ける姿は、どうにも想像出来ないらしい。

「おめさまは、ずいぶん活躍してるじゃんけ。鬼武蔵と一緒にだっけか？ この裏切りモンが、将来は国持ち大名かよ」

「わりいね。先に城持ちンなつて。処でおまんの親父殿は何処いここでに居るけ？」

勝長は周囲を見渡す。陣中には多くの武田方の武士も居たが、この場に居る真田勢は信幸廻りだけであつた。

「俺が名代よ。ちょうど良かった、俺もおめさまを捜つかつてたずら」

早くから武田の負けを悟っていた父昌幸が信幸に課したのが、織田方への使者だった。家中で唯一、織田家に つまり勝長に

縁があつたのが信幸であつたゆえ。

「おめさま、中将（織田信忠）様と繋がりには有んけえ？」

「有んもちよにも、中将様の与力よ」勝長は胸を張る。「でえ、殿の命でおまん処の調略に来たっちゅうこん」

そう云つたところで、突然、勝長の近従が飛び掛かつて信幸を縛り上げた。

「な、何をするけツ」

「あ、そーそー俺、織田に行つてつから名前変えてよ」信幸の抗議を、勝長は全く意に介さない。「源三郎信房ちゅう名になつちゅうから。おまんと一緒ずら」

「だから？」

「同名のよしみ、おまん人質になれし」

「待つちよお、俺も交渉に来たさあ。何故人質になるでえ？」

「おまんの親父殿、おつかねえんだよ」

縛められた信幸の腕を取つて、勝長改め信房はズンズンと歩き出す。それは甲斐時代、鬱蒼とした山の中を武士の鍛錬と称して共に駆け廻つた頃と本当に何一つ変わらない態度であつたが、同時に信幸は、彼が人の話を碌に聞かない人間であつたと云う事を、今更ながらに思い出したのであつた。

* * *

「ふうむ」

若き信長の息子達と対面した真田源五郎昌幸は、その後ろに控えさせられた息子を一瞥して小さく唸つた。

「年若の武將に生け捕られるとは、真田家の息子としてまつこと情けないのう。同じく源三郎の名を持つ織田の御坊様はほんに素晴らしき手柄を立ててなされると云うに、コレ信幸、うぬは恥じ入つて名を源三郎から愚三郎に変えい」

「役目は果たしたでございましょう。手前に居わすは菅九郎信忠君であらせられるぞ。許しも請わず戯れ言を述べるその口こそ真田家

の恥、息子として叩つ斬つてやりましょうや」

信幸の隣に控えた信房が咳払いすると、真田親子はぴたりと口を閉じる。

「シテ、大将御自ら下郎ごときに如何用でございましょう」

改めて居住まいを正して、昌幸は平伏した。

「イヤ、だつて御主、真つ先に私に降伏して来たからさ」

三月十五日、飯田に勝頼親子の首が晒された日に、雨の中を昌幸の者が書状を持って来た。

木曾義昌、穴山信君　信君のみ徳川家康同伴で十一日に信忠とも対面していたが　等を筆頭に、殆どのが二十日に法華寺へ詣る中、一人浮いた行動を取った男に、信忠は興味を持った。

「それと攻弾正の息子とやらを一度見てみたかつたしな」
せめだんじょう

頬の出っ張った、黒目がちな顔の男だった。やや丸まった背中と云い、何となく猫や子狐を思わせる男である。秀吉とはまた違った方向で、愛嬌のある雰囲気纏っている。

「此度の戦は殿が率いられたものにございましょう。ならば殿に申し出るのが道理」

信忠は呵々と笑う。

「二代目には嬉しい台詞だな。勝頼にもよくそう申しておったのか？」

「勿論」

「成程。流石は攻弾正の子、逸話に違わぬ二枚舌振りよ」

「お褒めに預かり光栄にござる……シテ？」

昌幸はごくわずかに顎を上げた。その大きな黒い目が、信忠の目を捉えた。

「ふむ……」扇の天を唇の舌に当てながら、今度は信忠が唸る。どう切り出したものかと少し迷って、結局素直に訊く事にした。

「お主、新館御寮人の行方を知らぬか」

昌幸は二回瞬きして、それから深く面を伏せた。

「存じませぬ」

「まことか」

「殿が未だ姫を想うてらっしゃったとは存じませなんだ」

「勝頼の娘と仁科の娘の行方が判らない。あと小山田の娘もだ」

扇を畳み、相手の反応を待ったが微動だにしない。

「勝頼共は一度は岩櫃^{いわびつ}へ行こうとしたのだろう？　ならば先んじて女子供が移動したと云う事はないか？」

「……我が元には遂に誰もいらっしゃいませなんだ。無念にございます」

「では北条側へ向かったのか。勝頼内室の縁を頼つて？」

北条家は織田家に恭順の意を示している。そもそも、織田と北条が接近した理由が対武田にあるのだから、どう転んでも北条は武田の敵であるのだが。

「それは、某^{それがし}には図りかねます」

「北条に帰属しようとしているのか？」

背中の六文銭を見せる男は無言、しかし背中の向こう、部屋の隅で信房と一緒に控えている息子の方は明らかに動揺した。

「安房守（北条氏邦）に書簡を送ったろう。私達が上野に入った頃か、勝頼等が岩櫃に向かつていれば、それを手土産に降るつもりだったか？」

「……真田家を滅ぼすおつもりですか」

土壇場で裏切った小山田信茂を、信忠は許さなかった。八歳になる嫡男を人質に出す代わりに所領を安堵する、そう云って善光寺に信茂一家を呼び付けた信忠は彼等を散々詰り倒し、のこのことやって来た全員を殺害した。

「どうしようか非常に悩んだんだけだな」

信忠は扇の先で信幸を示す。「その子を私にくれれば、所領を安堵してやつても良いぞ」

「それは五日程前に小山田家が通過した道ですな」

「良いではないか、お主の処は未だ息子が残っておるう」

指名された息子の方は、顔を真つ青にして膝を見つめている。

「とは仰せれても、世の中何があるか判りませぬゆえ、子の数が大いに越した事はなし」

「恨みを買ってそうだものな。一服盛られた事とかあるだろう」

「盛った事なら幾らでも」

互いに寒々しい笑い声を上げ、

「愚息でよろしければ幾らでも差し上げますが、その為には先ず朱印状を戴かねば。朱印状なくして息子はやれませぬ」

「残念。その辺については上様の裁量での。ちようど今、知行割の下知を触れ廻っておる真つ最中だ。マア上野一帯は本領安堵、滝川の下ならば悪い様にはならぬよ」

「さにあれば愚息は滝川様の元で」

「え、イヤイヤ安土行きだ」

渦中の愚息、信幸は今一つ真面目と云い難い上役の会話に息を詰め、雑話ついでに決しそうな己の運命に恐々となっていた。隣の信房に語り掛けたそうにしきりに横を向くががそれも出来ず、口の廻りを舌で何度か湿らせ、指先を意味も無く動かしている。

「安土に着いた途端、愚息が毒を盛るやも」

「宜しい。ならば撫で焼きだ　安土は良いぞ、冬でもかように雪は積もらぬし、琵琶湖のお陰で水の恵みも在る」

「何の。岩櫃にも榛名湖はるなこの恵みがありますぞ」

「上様が甘いもの好きだから堂上蜂屋柿どうじょうはちやがきの御相伴にも与れるぞよ」

「何の何の。こちらは奥州が近いゆえ、冬には鮭にも与れまする」

「更に更に今なら、上様にとく気に入られれば上の娘も娶れるぞ。目指せ第二の蒲生。と云うか徳を誰ぞ引き取ってくれ」

「……つかぬ事を御伺い致しまするが、なにゆえ愚息如きにこれ程までに拘っておいで？」

「頭の良い奴が欲しいんだよ」信忠は肩を落とす。

「否、部下が愚かだとは云わよ。むしろ頭は良い。知恵も廻る。学も有る。……なのに何で一切活かさぬのだ、あやつ等」

返答出来ない真田方には構わずに、信忠は目を閉じて腕を組む。

「親世代は文武の均衡に優れた武士の誉れ高いもの達ばかりなのだがなあ。活かせぬと云うか、活かす気がないと云うか。ぶつ殺す方向でしか発揮しないと云うか。ともかくもう少し頭の方を先に働かせる奴が欲しいのだ。」

その点、お主の息子達は知略に優れた土と源三郎に聞いたぞ。何でも躑躅ヶ崎館つじがさきの守備について、毎夜兄弟で熱く語り合っておったそうなの。是非に私の参謀に迎えたい」

その議論が白熱した揚句、どちらがより効率的に館を落とせるかと兵を集めて攻め入ろうとし、勝頼に露見して門前に逆さ吊りにされた……と云うオチについては、昌幸他敢えて教えるものはなかった。

特に昌幸は、それを煽った張本人でもあるので。

「それとも真田家は北条を取るか？ それも一興。が、武田の脅威がなくなつた以上北条とはこれまでの良好な関係が保てるかどうかは判らぬなア。それを知らぬお主でもないと思うが」

「北条と事を構えるおつもりか」

「さあてどうか。織田が北条に喧嘩を売る道理はないが」

だがしかし、今回の武田征伐にあたつて織田家は北条家に一切の情報を流さなかった。北条の出陣が二月二〇日、これは北条が独自に甲信情勢を調べて招集をかけたものである。

結果武田征伐の状況が掴めぬまま、北条家は功を上げる事が出来ずに今回の論功でも報いられる事はなかった。

不満を持たぬ筈がない。

「でもマアそれはさておいて。真田家は真に御寮人を匿っておらぬのだな？」

「天地神明に誓つて」

「そうか」

信忠は再び扇を顎に当てる。昌幸の背中の六文銭を見た。

「お主、上様の元にはこれから参るのだよな。　なら、上様には内密で新館御寮人等の行方を探れ。どうせこれからも北条と裏でコ

ソコソ繋がるのじゃろ。御寮人の件、上様に悟られずにやれると云
うなら、草津温泉の湯銭の件を上にも利きしてやって良いぞ」

破ノ急 二

信房を付き添いに、真田家は退出した。彼を横に、信幸は見慣れた諏訪館の廊下を歩く。歩きながら、信房が袖を引つ張つてきた。

「おまん、信忠殺れし」

「はあ？」

思わず大声を上げて振り返り、慌てて信幸は声を潜める。「何よぬかす。おめさま先刻の会話聞いちゃあいんけえ？」

「何故素直に云う事聞け。おまんら信玄の眼ずら、ちつたあ俠氣見しよおし。……信忠はひとつきり（しばらく）諏訪に居んけど軍勢は木曾と伊那の口から帰るから、今手薄になつてんだよ。この機会に殺つちまえ、真田の名を天下に轟かせんだ」

「轟いた瞬間燃え尽きつさよ。俺は長生きしてえ」

「諦める、名を上げてこそその武士じゃん。ここで一緒に信長も討つちまえば、真田が天下を取れるじゃねえか」

「止めろし、おつかねえ」信房の口を塞いで周囲を見廻す。片側は壁、片側は控えの間、控えはピタリと襖が閉じられて、幸い人の動く音はない。「おめさまな、今回の戦で俺等がただひでえ目に遭つたと思つてんだ。これ以上とつく金も氣力も無つちよ」

「意氣地なし。どいつもこいつも薄情だ」

「いちゃもん云つちよし。なら、おめさまが織田家滅ぼせば良いずら」さすがに腹が立つて、信幸は織田家の若者を睨みつける。勝ち馬に乗れた奴に云われる筋合いはない。武田、織田と大名の家で育つた御曹司に、信濃の弱小豪族の世知辛さが理解出来る筈もないのだろうが。

「……俺は犬山衆の面倒見にやらん。信忠を敵に廻す訳にはいかん」

「おーう俺等も地下衆や一門抱えてんだ、バカやる訳にはいかんちよ。今戦仕掛けても廻りみんな敵じゃねえかよ、おめさまは籠城を

経験してんだから解るだら？ 戦に負けるつちゅうんがどんなけ悲惨か。俺等が腹切るだけで済むんならともかく、下の連中まで苦労はさせれん」

ところで真田昌幸は、立ち止まった息子達の五歩前で事の成り行きを見守っていた。ソ、と近くの襖を明けて出て来た人物と小声で耳打ちし合い、時に談笑し

「あ……」

「どうした？」

大口開けて硬直した信幸を見て、信房も肩越しに昌幸を覗く。そして凍った。

「エエト、殿……いか、いかように、ございまして、か」

織田信忠が笑いを抑えかねた表情で、昌幸の傍らに立っていた。

「イヤな、丹羽達^{にわ}がもうじき草津に湯治に行くゆえ、迎える準備を頼もうと思つて忘れておつたのだが……今どう聞いても謀反な話をしておつたよな？」

猛烈な勢いで信幸は首を振る。総髪に戻していた為、尻尾の先が鞭の様に信房の鼻を打った。

「そうか。上様は諏訪から富士山を見て帰るらしいからな、詳しくは親父殿に訊かれるが良い。ゆめ気をつけられよ、岩櫃には吾妻山を挟んで森武蔵守の所領が控えておるぞ」

云い訳したいが言葉が出て来なかった。この御家の危機に昌幸は頬を膨らませ、今にも声を上げて爆笑しそうになっている。斬り殺してやりたい誘惑に駆られながら、取り敢えず信幸は土下座した。

「い、今のはッ、決して謀反の企みなどではございませぬッ！ この信幸、織田家の為に全身全霊で尽くす所存、そうでございますよね父上！ ネ！」

と話を投げた先の昌幸は、何故か柱にしなだれ掛かつて袖で顔を隠した。

「愚三郎……」

弱々しく声を震わせ、「うぬが然程に四郎様を慕うていたとは…

…父は気付いてやれなんだ……。済まぬッ……。才息子を亡くすは何にも増して悲しかれど、父も覚悟を決めたぞよ。この上は上様に討つて出て、潔く散り候へ」

「だから違うつつつてんだろクソジジイ！ 御家の大事にわにわにしちよ（ふざけるな）！」

「え？ 違うの？ あれほど四郎様に可愛がつて戴いたのに嫌つておつたの？ やーだー」

「そうじゃねえ！ オメエわざとやってんだろ！」

「……とマア何だかんだと申しましても、かように血の気は多うございます。次男の方がまだ温厚でございますよ？」

「問題ない問題ない。今のが鬼武蔵なら首が飛んでおる。では丹羽等と赤沢の件頼んだ。源三郎 あ、織田の方な 早う送つてやれ」

「……俺、どおいでこんな奴の子に生まれちまつたんけ……？」

悠々と歩く昌幸、その父に引き摺られながら去つて行く信幸と肩を落としてとぼとぼ付き添う信房を見送つて、信忠はおもむろに襖を引いた。

「越中、今の遣り取りは聞いたな」

「一から十まで」

信忠は頷いた。「で、源五郎殿の申しておつた事、心当たりはあるか」

控えていたのは坂井越中守を始めとする屈強のもの四名。具足を纏い弓刀を抜いて、片膝立てて体勢を取っている。

他にも三名程、武者を隠してある。

「いえ。少なくとも私の知る限りでは聞いた事のない名です」

「去年、明智城でお主の親族衆を殺つた者共ではないか」

「あれは飯羽間の連中です。明智氏は組しておりませぬ」

越中守は首を振り、

「加治田（かじた斎藤利治）様が御存知やも。御母堂が一族の出、今の東美濃の動向にも明るうございますゆえ」

「……だな。弥三郎」

待機していた内の一人、しもかたやさぶろう下方弥三郎が槍を下ろして進み出る。「今すぐ岐阜へ行つて新五郎シンゴに問い合わせて来い……明智光國なる人物についてな。出来れば明智一門の係累交友も洗い出しておけ」

「御意」

「越中は変わらず源三郎の後ろに随く事。どちらもくれぐれも当人や上には悟られぬ様に気を付ける。新五郎にも厳命しておけ」

昌幸は云った。正月に、伝五郎を名乗る明智家の使者が来たのだと。明智光國と署名された書状を渡し勝頼に上洛を勧め、徳川への挾撃を提案し、信長の暗殺を表明したのだと。

伝五郎の名には心当たりが在った。ふじたでんごろう藤田伝五郎行政ゆきまの事であろう。しかし彼が正月前後に安土に居たのは、光秀を訪ねた際に信忠自身が確認している。そもそも行政は使い走りに出される程低い身分のものではない。

光國の名は記憶になかった。光秀の側に侍っているものなら行政の名は使わなかっただろう。否、勝頼に発破をかける事もなかったに違いない。

当時は未だ武田に対する調略は極秘扱いだった。武田家の内情を知る者は極僅かであった。おそらく光國とやは家中に居ないか、居ても大した地位には就いていないかのどちらか。一方で光秀の家臣の名を知れる程度には、身分があるものだと推測出来る。

（だが何故明智の名を騙ったのだ？）

東美濃絡みか、はたまた恵林寺の和尚絡みか。光秀本人ではなく光國と名乗ったのも謎だ。

（何にせよ面白くない事だ）

光秀は信長の腹心、今も信長に従って甲府を下っている身なのだから。

破ノ急 三

「じゃん、だら、りーん！」

織田信長が現れた。

「竹千代ゲンキー？ 於鍋おなべご苦労ー。富士山スゲー！」

「……酒を飲まれてます？」

出迎えたのは新たな駿河の主、竹千代こと徳川家康で、場所は古こ府中の躑躅ヶ崎館跡にしつらえられた仮御殿、四月三日の事である。信長が甲州から駿府、遠江、三河を経て安土へと凱旋する旨を信忠方から聞きつけて、家康一向は慌てて迎えに上がったのだが、信長等は予定の刻限を大幅に過ぎても現れず、すわ変事かと緊張した処でコレである。変事ではなく当人が変人だった 悲しいかな三〇年も前から知っているのだが。

様子を見に行かせた於鍋こと本多忠勝ほんただかつ（幼名・鍋之助）は困惑顔で信長の隣にはべっている。その他郎党衆も皆無事の様子である。

「飲んどらへんわ、儂が酒飲めへんのはおみゃーさんもよう知ってるがねー」

素面の酔人は上機嫌で忠勝と腕など組んでいる。たいへん見目麗しくない光景だが、おかしい調子なのはどうも信長だけではないらしい。細川忠興、蒲生賦秀ますひでなど随同行の徒も頬を上気させ、今にも踊り出しそうな勢いである。

「エエト……一体何があつたんです」

唯一正気を保つていそうな明智光秀に救いの目を向ける。どうした訳か酷くやつれたふうの光秀は、疲れ切った声と共に首を振った。「本日、富士山を拝見しましてね……」

富士山 その素晴らしき偉容を何と表現すれば良いものか。

日本最高峰、その並ぶものない麗しい姿。古くは萬葉集や竹取物語ものがたりにもその名を見せ、正しく大八洲おおやしまを代表するに相応しい霊峰である。

伊勢物語や曾我物語などの絵巻物でその形を知ってはいても、じかに目にしたものは殆ど居ないのである。まして尾張美濃は平野、高い山と云えば遠く霞んだ伊吹山いぶきさんが乗鞍のりくら、御嶽おんたけ、近くに在るのは中途半端な高さの山がだらだらと続く養老山脈ようろう、稲葉山いなばやまなぞ富士山の十分の一にも満たぬ標高しかない。想像を絶する風景に興奮するのにも無理からぬ話ではある。

「よっしゃあ、あそこへ行くぞ」

大ヶ原だいがはらから五町程、前日の雨で出来たぬかるみをぐちよぐちよ進む中で現れた山体を見た瞬間、信長は宣言した。

「殿、今日は躑躅ヶ崎館に逗留の次第……」

光秀の指摘は両の耳の間を突き抜けて行ったらしい。

「者共続けい！」

「御止め下され！」馬を進めて立ち塞がると刀を向けられた。「徳川殿が躑躅ヶ崎で御待ちです！ 戯れは控えなされよ」

皆もそう思うだろう、と周囲のものを見渡した光秀は、味方が己を含めて二人なのを悟った。

「御坊様！」

なのでもう一人の味方を全力で取り込む事にした。「御坊様も、徳川殿を待たせては申し訳ないと仰っております」

「いえ、申してませんけど」

織田信房は廻りのもの達の高揚を、奇異の目で眺めていた。特に、父ながら五十路近い男のはしゃぎ振りには引いたらしく、そつと馬を離れさせている。

そんな息子の様子に、信長は気が付いていない。

「何じやい、おみやあはホント乗りが悪いでかんわ。未だ今朝の事根に持つとるんかね」

甲高い声を益々高くして語りかける父親に、信房はハアと吐息に近い返事を返す。

「……富士山は毎日見てましたから。……霊峰と申しましても、ただ高いだけの山ですよ。天狗だの龍だの遭遇した事ないです」

「天狗が居るのか！」

と喰い付いたのは蒲生賦秀、一見利発そうに見えても若者は信用してはらないと、光秀は心に刻んだ。

「まあ……伝承ですけど」

「山裾がでえりやあ長えけど彼処あつこには誰も住んどらんのか」

稲葉山の麓には千畳敷御殿、伊奈波神社いなばなどが存在している。

「ぐるつと山と湖に囲まれてますし、樹海抜けるのが先ず面倒くさいですし……ああでも駿府の方に浅間大社がありますか。あちら側なら人が居るやも知れませぬ。でも噴火しますし洞窟が多くて崩れると怖いしで、住みたい処ではありませんせぬ」

「洞窟？」「森が在るんか」

「後生です。日向鷹を試すのも妖怪退治に出掛けるのも、後日にして戴けませぬか……」

一同の目の輝きは、童が菓子を見付けた時のそれによく似ていた。これが十に満たぬ子なら可愛かったのだろうが、生憎とうに元服を過ぎた男共、どころか一部老境に足を突っ込んでいるものも居るでは如何ともし難い。

この後詰めの子面について、物申したい事しきりの光秀であつた。一方信長は信長で、光秀に物言いを付けたい模様だ。

「おみやあも冷めとるで駄目」鼻を鳴らして吐き捨てると、騎乗していた遠江鹿毛で威嚇する。「面白味のない奴っちゃ。それともアレか、富士山なんぞ大した事ないっちゅうんか。おみやあとか内蔵助（斎藤利三）とかは云いそうやな」

光秀にとって幸運だったのは、こんな処で臍を曲げるのは損であると信長が判断した事だろう。それ以上揉める事もなく、信長一行は古府中へ進んだ。

もつとも、道中何かある毎に彼は富士山へ向かおうとしたし、こんな戯言も口走ったが。

「よし、信濃が落ち着いたら富士山に城を建てたる」

「止めて下さい。稲葉山城でも登るのに半刻は掛かるのですから」

「と、云う次第でございます」

「……御愁傷様です……」

家康は心の底から同情した。信長から逃げ出して来た忠勝も痛ましそうな表情を浮かべているが、彼はこの後一晩中光秀の愚痴に付き合わされる事となる。

「デ、時に源三郎様も御同行遊ばしてらっしゃるのですか」

しかし所詮は他人事、家康は直ぐさま話題を切り替えた。こちらもまた目を煌めかせ、きよろきよろと周囲を見回す。

「……何か私奴に御用でしょうか」

轡くつわを取つて厩うまやに向かつていた信房が、向きを変えて寄つて来た。

それを喜色満面の笑顔で迎えて、

「よう御越し下さいました。それがしは浜松城主、徳川次郎三郎と申します。御目にかかれて光栄至極、御坊様の御活躍は甲斐に居わした頃より伺っておりますぞ」

「……どうも」

愛想のない若者だった。十五歳と聞いていたが雰囲気は随分大人びている。容貌は信長そっくり、やや小柄だが、伸びた背筋や不機嫌ながらテキパキした立ち居振舞いからは彼が武士としてよく訓練されている事を伺わせる。

「此度は上野じょうずけで大層手柄を挙げられたとか。是非私奴に御活躍を聞かせて下さいまし」

「ハアそうですか」

どこまでも気のない返事だった。もしかして家康の名は武田ではあまり知られていないのであろうか。

「私奴は信玄公御健在の頃、三方ヶ原みかたがはらにて大敗を喫しましてな、武田家とはそれ以来でございますゆえ若様には……」

「ああ結構です。三河様の事はよく存じ上げております。三方ヶ原

のウンコた」「御久しゅうございます三河様！ 私、坂井右近いひはざま うえ（右近将監政尚）の息子、坂井越中守と申しまする！ 本日は飯羽間右衛門尉もんのじょうを成敗しに参りました次第、早速ですが彼奴めをぶつ殺しと存じます！ ついでに若様お借りしますがどうぞよしなに！」

坂井越中守が韋駄天の勢いで信房の口を塞ぎ、首を固め、それから両脇を抱え口上を述べて走り去った。

家康も忠勝も、呆氣に取られて見送るばかりの手際だった。

「ちつと連れ去るのが遅かったな」

「で、ございますね」

その間に、信長が森成利を従えてやって来る。彼は家康の隣に立つと、慰める様に家康の背中に手をおいた。

「竹千代、気にすんな。武田もなくなつた事やし、おみやあさんの赤っ恥はもうこれ以上は広がらへんわ」

慰められる方が悲しい事も、世の中にはある。

「……私、何か若様の気に障るような事を致しましたでしょうか」

「気にせんといたつてちょ。今朝恵林寺焼いて以来ずっとあんな感じなもんだでよ」

信長は首をすくめた。

破ノ急 四

恵林寺えりんじが焼き討ちされたのは、寺内に佐々木義定等ささき よしただを匿かくつて、その引き渡しを拒否したからである。

古来、寺は俗世の外に在つて、境内の内に入れば外界のいかなるしがらみも権力もこれに干渉出来ぬ事になっている。ゆえに敗者が寺を頼る事は珍しくなく、そのまま寺で髪を下ろしてしまえばもう手出しの仕様はないのだつた。

とは云えそんな建前が守られていたのは遙かの昔の事、何より寺自身が古代から俗世へ介入し続けているのだから、俗世絡みで焼き討ちに遭う事自体は、仕方がないと云えよう。

問題は、寺の長老が快川紹喜かいせんじょうきである点だ。

和尚は俗姓を土岐と云う。美濃国守護だつたあの土岐氏である。始めは美濃の崇福寺に在つて護阜しほ（住職）を勤め、斎藤義龍との間に伝燈護国寺問題でんとうごこくじが起つた際には尾張国犬山に出奔してこれと戦つた。

乾徳山恵林寺の住職となつたのはこの乱の後、永禄七年、信玄に請われての事である。

『国師』『禅門』と号される日本きつての名僧の一人、信玄に機山の道号を授けたのも彼だ。

「その和尚を弑ころするのが世にとってどれ程の損失になるか」

「知つておるよ。元ウチの菩提寺の住職だもの。お主本信心深いよなあ」

信忠は自分を睨み上げる弟を心底不思議そうに見下ろした。

「殿、手筈が整いましてございます」

そう信忠に告げたのは関成政。長可の義兄である。

「大儀。さて和尚、久方振りの顔合わせが斯様かようになつてしまつたのは誠に悲しいが どうする？ 這いつくばつて佐々木等の逃げた先を吐くのならば其許そこもとは助けてやらんでもないぞ」

山門に立て籠った恐怖に引き吊る顔々の中から、皺の刻み込まれた面がぬつと前に躍り出る。

「相も変わらず他を軽んずる事はなはだしきよ。早う火を付けられよ」

「良い御覚悟だ、勝頼の骨も引き収めぬ卑怯者の割にはな。しかし和尚の意地に付き合わされる下々の何と悲惨な事か」

「助ける気など欠片もなかるうに、まっこと情けなき云い様。

死への門出に一つ最期の説法を致しましょうや。御耳を傾け給え」

「済まぬが今日は予定が混んでおるのでな。長嘶に付き合つてやる暇はないのだ」

信忠の号令一つで寺は焼かれていく。初めはぶすぶすと低い音を立てて黒煙が伸び、それから火の粉の弾ける甲高い音が一声鳴ったと思うと忽ち焰の手は山門を覆った。

盛る火と黒煙で建物は隠れた。けれど焰の嘶きにも負けず、焼かれるもの達の断末魔は耳を劈いた。

やがて風向きが変わって山門が再びその姿を現した時、一同の目に入ったのは今にも転げ落ちんばかりに身を乗り出した人々だった。押し潰されたか燻されたか半数は動かず、残った半分は目ん玉と舌を飛び出させて手足を動かしてもがき苦しんでいる。

その中で唯一人、快川和尚だけが微動だにせず結跏趺坐を組んでいた。朋輩が泣き叫び、織田家の連中が囃し立てても決して騒がず、最期にこう一言云って果てた。

「安禅必ずしも山水を須いず、心頭滅却すれば火も自ら涼し」

だが、焼かれているのは悟りを開いたものだけではない。やがて一人の若僧が山門から飛び降りた。織田家の雑兵の真ん真ん中へと墜落する。

幸い、多くのもの達が槍を下ろしていたので助かった。群衆の中から引き摺り出された若僧はそのまま何処かへ連れて行かれる。一人が助かったのを見て希望を託したのだろう、また一人、それからもう一人、次々と人が山門から墜ちていった。

地面に落ちた一人と目が合った。火は既に全身に燃え広がり、背中から龍の鬣たてがみの様に靡ないている。

助からないのは明らかだった。

「御坊さま！」

それでも小坊主は叫んだ。おそらくは最期の力を振り絞って。

「御坊さま！　お願いです、助けて！」

信房は一步、後ろへ退く。

「助けて！」

……恵林寺は馴染みの場所だった。武田家の菩提寺で、信玄の墓も在る。勝頼に連れられて行った事もあつたし、一人で馬駆けしていた際に寄った事もあつた。寺の小姓達と柿を盗んで、尻を打たれた事もある。

「御坊さま！」

信房は逃げ出した。身を翻し、人々を掻き分けて山門の見えない処まで走った。一度も振り返らずに馬止めまで辿り着き、たまたま目に入った老人の前に立ちはだかった。

「止めて下さい」

老人　明智光秀は怪訝そうに眉を寄せた。

「国師は貴方様の同族の御方でしょう。御自分の係累が火に焼かるを良しとなさるのか」

「……この件は禅門に非がありますでしょう。素直に佐々木等を引き渡せば良かったのです。ここで引き下がっては我等が侮られまする」

「この外道共！」

廻りが一斉に信房を向いた。光秀の馬が、不安そうに一声嘶いた。「何が天下布武だ腐れトンチキ。テメエ等のやってる事なんぞ焚書坑儒と変わりねえじゃねえか。田畑焼いて、国人根切りにして裏切り者しか残さなくて、揚句寺まで焼くのかよ。俺らに死ねしちゅうこんけ？　ふざけんな、テメエ等何様のつもりだ！　今直ぐ同じ目遭って死んじまえ！」

空は薄く雲が張り、太陽は霞んで異様に赤い色を滲ませていた。視界の端には黒煙が広がっている。その景色が、信房には甲信の未来を暗示している様に思われてならなかった。

森長可や川尻秀隆など、甲信に入った連中は早速圧政を敷いている。田畑は戦で焼かれてしまったのに人足を徴発すると命じられても、出せる筈がない。

「源三郎様はお優しいうございますなあ」

背後から合いの手が入った。振り返れば信忠が、薄ら寒い笑顔を顔に貼り付けながらやって来る処だった。

「甲信の民の暮らしに心を痛め、法を重んじる事、まことに慈悲の極みにございました。ですが源三郎様、そもじも歴とした織田家の一人、甲信に向ける愛情の半分です。よろしいですから我々の心情もかんがみて戴ければ有難く存じます」

「……好き好んで織田家に参ったわけではございませんぬ」

睨み据えた相手は無感情で信房を見下ろす。彼が自分を疎んじている事など、とうの昔に了解済みだ。事情を考えれば当然だろう。それを解っているから、今日までずっと耐えてきた。

「……何がお主をそうまでさせるのかは知らぬが」

信忠の声は抑揚がない。「お主がどれ程義理立てしようと、甲信の誰もお主を同党とは見なさぬよ。お主は織田家の人間だ。上様の子だ。それをよく考慮して口を開くのだな」

そんな事は知っている。信房は唇を噛む。知っている。信忠に言われるまでもなく、甲斐で厭と云う程身に染みている。

長篠を奪られた時、岩村を奪られた時、高天神を奪られた時。武田の土が死んだ、その度に向けられた視線の、何と憎しみに満ちた事か。

「余りに舌禍が過ぎる様ならば、私がお主を罰せねばならぬ」

「それはようございましたね。さぞ心安らかになれる事にございましょう」

寺の焼ける臭いが漂って来る。益々鼻の根に皺を刻みながら、兄

の反応を信房は待つ。

「……お主」

やがて口を開いた信忠の表情は、何故か少し悲し気に見えた。

「もしも本気でそう思っておるのなら……哀れだな」

その意味を解しかねて、信房は首を傾けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7145u/>

桔梗夜話

2011年10月28日19時54分発行